昭和50年度

—勝沼バイパス道路建設に伴う—

寺平遺跡発掘調査報告書

1977.3

山梨県教育委員会

序　　文

建設省による国道２０号線の交通緩和事業として、勝沼町大善寺から石和町に通じる勝沼バイパス建設工事に先立つ埋蔵文化財の緊急発掘調査は、昭和４７年３月に始められ、昭和５０年１２月までの実に４年もの歳月が費された。この間は甲斐国分寺、尼寺を中心とした古代甲斐国の政治経済的に重要な位置であったため発掘調査によって条理遺構や奈良、平安期の集落址の研究が進展したと同時に実態も明かにされてきました。

こうした中で、この寺平遺跡は縄文時代前期末から中期後半にかけての土器を出し、中期初頭と言われる五領ケ台期の住居址が発掘された点では東山梨地区のこの時期の研究に貴重なものであります。県民の文化遺産として研究学習の書として広く活用していただきたいと思います。

なお調査にあたられた調査員、補助員作業員の皆様を始め、終始調査に好意をよせていただいた地元藤井区の皆様に感謝申し上げますと同時に、用地接渉にあたられた建設省甲府工事々務所の皆様に厚くお礼申し上げます。

昭和５２年３月１日

山梨県教育委員会

教育長　丸　茂　高　男

例　言

1．本報告書は昭和５０年度に建設省関東地方建設局と山梨県教育委員会との委託契約に基づき国道２０号線改良工事（勝沼バイパス建設工事）に先立って実施した山梨県東山梨郡勝沼町藤井字寺平地内の埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書であり、発掘担当者は谷口一夫（日本考古学協会員）及び県文化課文化財主事末木健によった。

2．本報告書作成にかかる経費は昭和５１年度の委託契約によるものである。

3．遺物整理、製図、トレースは末木、伊藤、佐野、米田、野口、長沢、保坂が行なった

4．図版、挿図作製は末木、伊藤が行なった。

5．原稿執筆及び編集は末木の責任による。

6．勝沼バイパス関係の報告で、遺跡名を従来から道路杭NOで統一されていたが、本報告では小字名を使用し、杭NOは挿図第２図上に表わした。

7．遺物、図面は県文化課に保管してある。

目　　次

1. はじめに …… 1

(1) 発掘調査に至る経過 …… 1

(2) 調査組織 …… 1

2. 遺跡の概要 …… 3

(1) 遺　　構 …… 4

(2) 遺　　物 …… 6

3. まとめ …… 40

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　遺跡地形図 …… 3
第３図　１．２号住居址平面図 …… 4
第４図　住居址土層図 …… 5
第５図　土壙平断面図 …… 5
第６図　遺物出土状態図 …… 7
第７図　遺物―土器 (1) …… 9
第８図　〃　〃 (2) …… 11
第９図　〃　〃 (3) …… 13
第10図　〃　〃 (4) …… 14
第11図　〃　〃 (5) …… 15
第12図　〃　〃 (6) …… 16
第13図　〃　〃 (7) …… 17
第14図　〃　〃 (8) …… 18
第15図　〃　〃 (9) …… 19
第16図　〃　〃 (10) …… 22
第17図　〃　〃 (11) …… 23
第18図　〃　〃 (12) …… 25
第19図　〃　〃 (13) …… 26
第20図　〃　〃 (14) …… 27
第21図　〃　〃 (15) …… 28
第22図　〃　〃 (16) …… 29
第23図　〃　〃 (17) …… 30
第24図　〃　〃 (18) …… 30
第25図　特殊遺物、石器 (1) …… 31
第26図　遺物―石器 (2) …… 32
第27図　土師器 …… 33
第28図　小淵沢町上平出遺跡出土遺物 …… 41
第29図　韮崎市宇波円井遺跡 …… 42

第30図　明野村小笠原字机腰出土土器 …… 43
第31図　御坂町八千蔵字宮の裏遺跡出土土器 …… 44
第32図　大月市宮谷遺跡出土土器 …… 45
第33図　都留市田野倉出土土器 …… 45

図版目次

1. ①遺跡遠景…… 49
②同近景…… 49
2. ③1号住居址…… 51
④1．2号住居址…… 51
3. ⑤1号住居址埋甕炉1 …… 53
⑥　同　埋甕炉2 …… 53
4. ⑦2号住居址埋甕…… 55
⑧　同　上 …… 55
5. ⑨1号住居遺物出土状態…… 57
⑩　同　上 …… 57
6. ⑪土製円板、玦状耳飾出土状態…… 59
⑫土師器出土状態…… 59
7. ⑬土壙遺物出土状態…… 61
⑭発掘調査風景…… 61
8. ⑮縄文時代土器…… 63
⑯縄文時代土器… …… 63
9. ⑰縄文時代中期土器…… 65
⑱　〃 …… 65
10. ⑲縄文時代中期土器…… 67
⑳縄文時代土器…… 67
11. ㉑　〃 …… 69
㉒　〃 …… 69
12. ㉓　〃 …… 71
㉔縄文時代石器…… 71
13. ㉕土製円板、石鏃、石錐、玦状耳飾…… 73
㉖土　偶…… 73
㉗縄文時代早期、前期土器…… 73
14. ㉘1号住居址埋甕1.…… 75
㉙1号住居址埋甕2.…… 75
15. ㉚1号住居址出土土器…… 77
㉛1号住居址出土土器…… 77
16. ㉜2号住居址埋甕1.…… 79
㉝2号住居址埋甕2.…… 79
17. ㉞平安時代杯形土器…… 81
㉟平安時代甕形土器…… 81

1. はじめに

昭和４４年３月に井出佐重氏を団長として行なわれた中央道長坂町内の発掘が本県の本格的な行政発掘の皮切りで、それ以来の８年の歳月に数多くの緊急調査が実施されて来た。この中には勝沼バイパスを始めとする中央道や大規模農道等の道路建設が主流を占め、農業改善、学校建設等も増加しつつある。これらは記録保存として発掘が実施されたものであるが、それ以上に小規模開発によって消滅していった遺跡も数知れない。

この為文化庁や県教育委員会では開発関係各省、公団、県庁各部局と協議を行ない、計画段階で遺跡の保護を計る様にしており、年々その成果が実りつつある。又、遺跡の周知を行う為に遺跡分布地図を昭和５２年度には完成させ、あらかじめの調整が円滑に進展する方策を講じてゆくことが考えられている。

本遺跡は勝沼バイパス路線発表後の昭和４５年１２月に実施した分布調査の際確認されたもので、その後の協議によって工事前の調査実施が決定された。

調査は昭和５０年７月２４日から８月１４日までの２０日間行なわれた。それに至る事務経過は次のとおりである。

50．5．13　建設省甲府工事々務所長より県教委に勝沼バイパス建設工事に伴う遺跡調査の依頼

50．7．4　同依頼の回答を提出

50．7．10　建設省甲府工事々務所長から文化庁長官あて文化財保護法第５７条の二による埋蔵文化財発掘届が提出

50．7．25　建設省甲府工事々務所長から県教委へ委託契約の協議

50．8．22　建設省関東地方建設局長と県教育長との間に委託契約が結ばれる。

50.7.24～8.14　寺平遺跡の発掘調査を実施する。

調査組織

団　長　井出佐重（山梨県遺跡調査団長）

調査担当者　谷口一夫（日本考古学協会員）
　　末木　健（県文化課文化財主事）

調査員　伊藤恒彦（日本大学）

補助員　米田明訓、野口行雄、井川達雄（明治大学）香月利文、山路恭之助（日本大学）
　　佐野勝広（国士館大学）保坂康夫（広島大学）

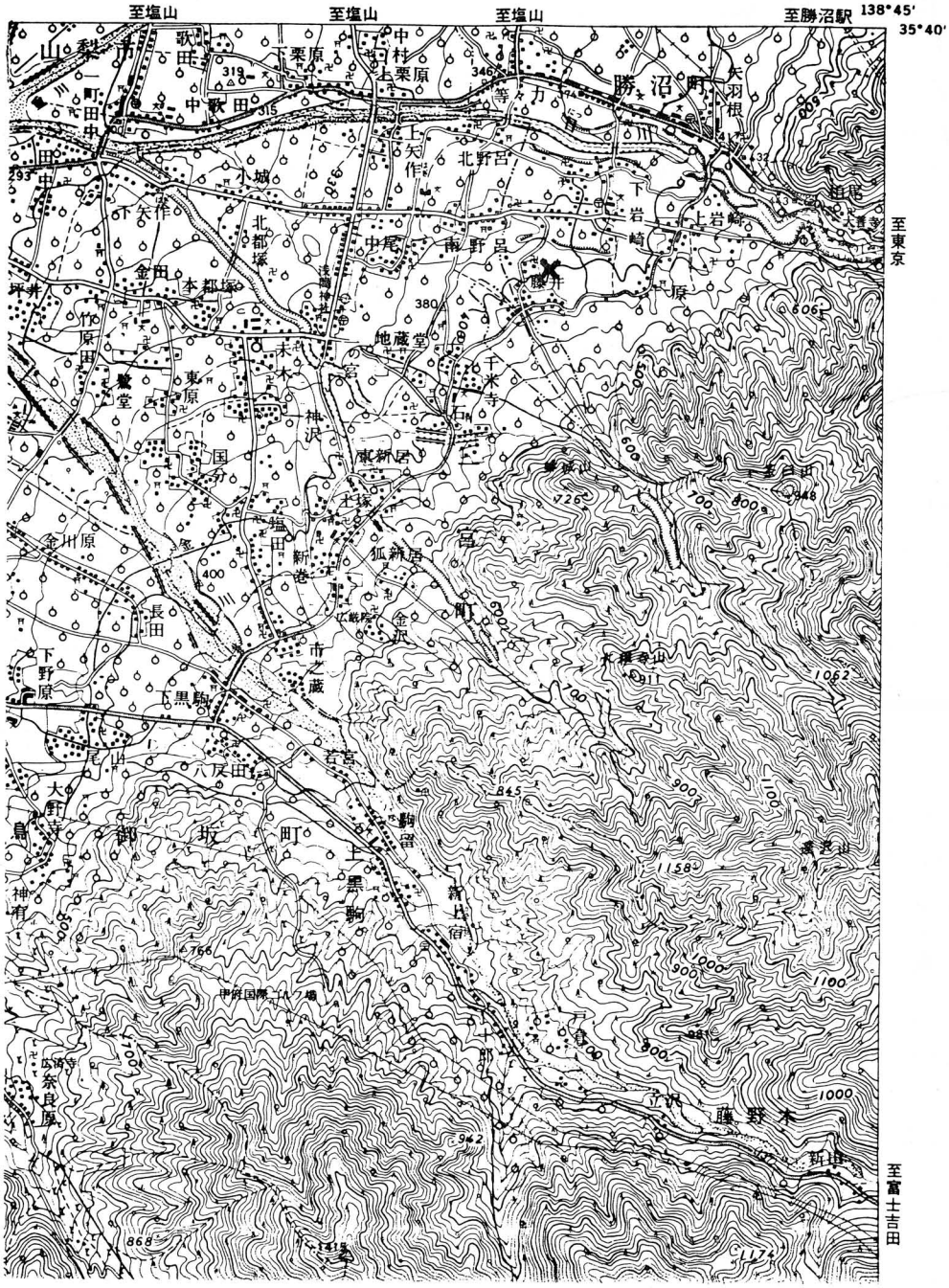
作業員　芦沢久夫、雨宮圭一、武井福夫、石原一行、大島春彦、堀内俊一、斉藤公利、岩間一明、田之口孝二、早川三十四（地元）

事務局

教育長　丸茂高男

文化課長　山寺　勉

調査係　鈴木富夫、波木井市郎、森　和敏、山崎金夫



第１図　遺跡位置図（×印寺平遺跡）

2. 寺平遺跡の概要

本遺跡は御坂山塊の西側に連なる茶臼山（標高９４８ｍ）と蜂城山（標高７２６ｍ）の間を河川が押出して形成した千米寺扇状地中央の北面する斜面、標高４００ｍ付近に位置し、秩父連山から南アルプスの雄姿を臨み、甲府盆地を一望する景勝の地である。正式な番地は東山梨郡勝沼町藤井字寺平であって、その名のごとく巾２００ｍほどの尾根状台地が北側の田草川に切られるまで続く。

第２図に遺跡の地形と遺構の位置を示したが、西側には深さ約４ｍ、巾２５ｍの谷があり、古くからの流路であったと思われるが、東側の河川は浸蝕巾も狭く、新らしいことが知れる。遺構が西側に寄って発見されていることも裏付けとなるかもしれない。

この遺跡の地目はブドウ園が全てであるが、近年の機械化導入などにより、地形が削平され段々畑となっている。勝沼バイパス路線発表後の分布調査の際には勝坂期、加曽利Ｅ期の遺物が地表に数多く散乱していたのだが、耕運機等の発達によって細片と化し、調査中の数回にわたる範囲確認の分布調査も充分な成果を得られなかった。しかし遺跡は南側にその中心を持つものの様に考えられる。

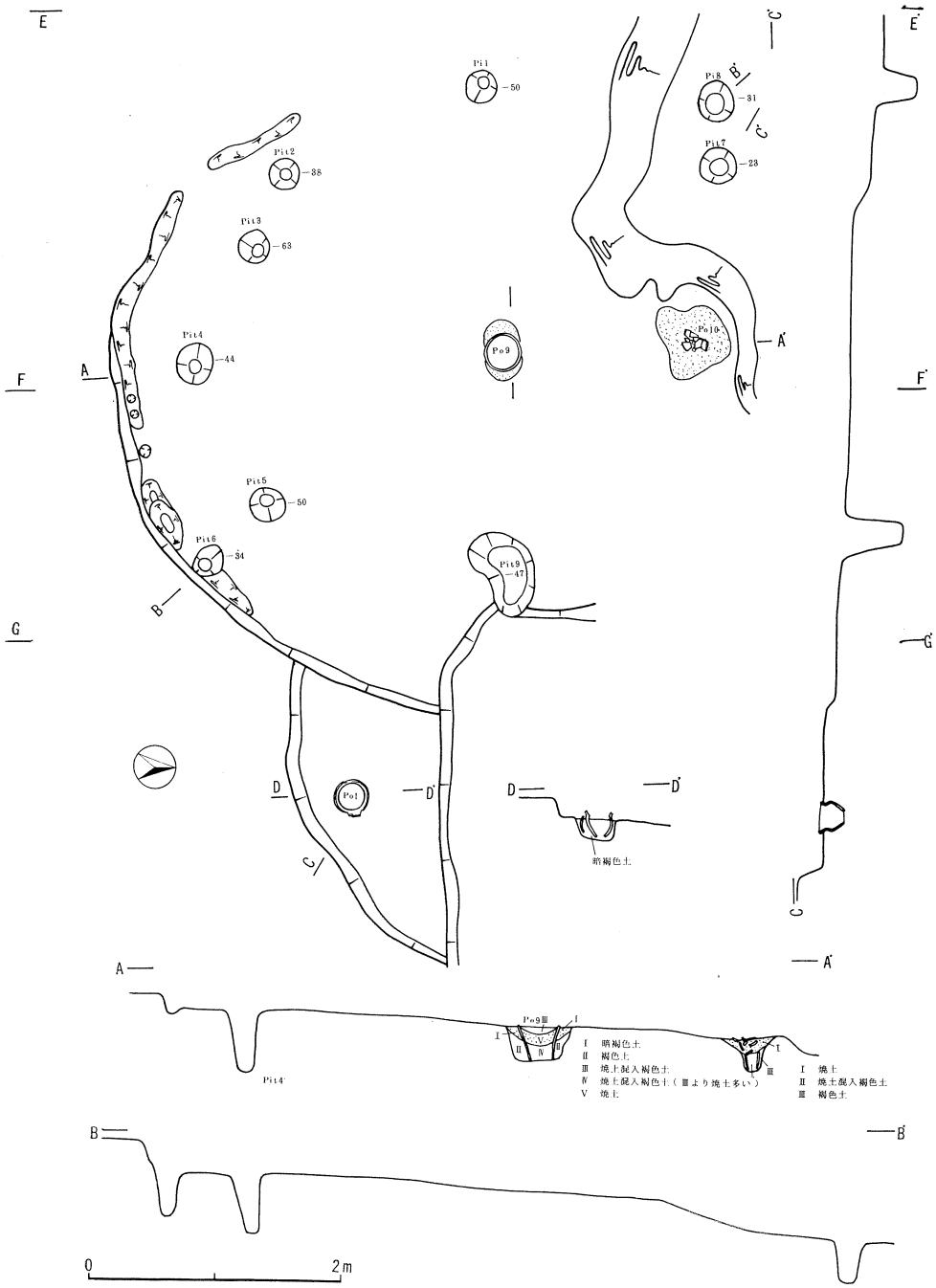
土層は道路杭Ｎ０１２７～１３１がほぼ同じで、表土（耕作土）１５㎝、暗褐色粘土質土１５㎝、褐色土（地山）へと続くが、その下に花崗岩の腐蝕土があり、中には礫が多量に混入している。遺構のある１３１～１３６の区間の土層は第４図の遺構土層図で示した様に約２０㎝の表土層の次の黄褐色土を掘り込んで遺構が造られる。

近辺の遺跡では勝坂Ⅱ（所謂藤内式）と言われる時期のものが一宮町中尾飛地にあり、南西方向２００ｍの高所にある。調査は行なわれたことが無いが中部で藤内Ⅰ式と呼ばれる良好な包蔵地であり詳細は不明である。

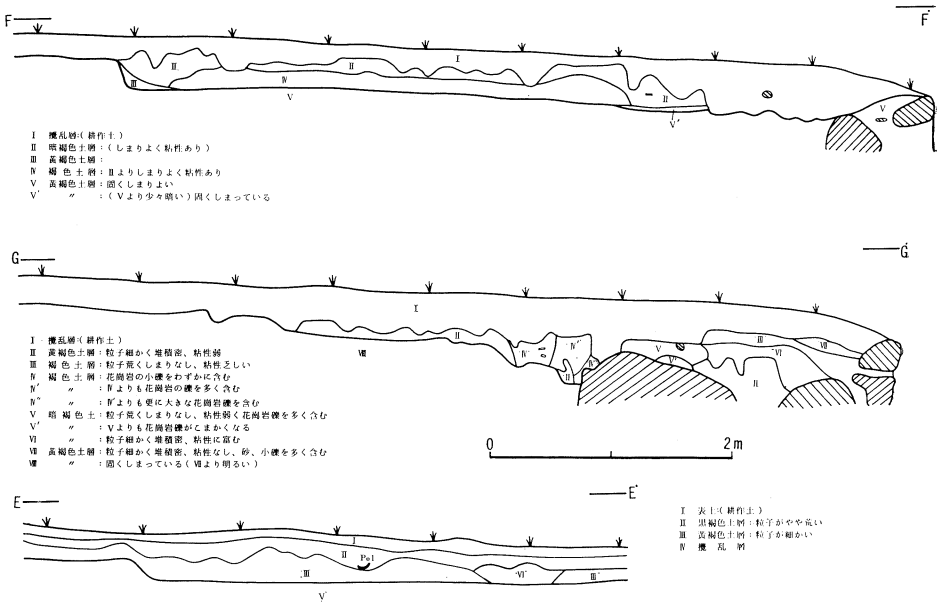
第２図　遺　跡　地　形　図

(1) 遺　構

寺平遺跡の発掘調査によって発見された遺構は住居址２軒と土壙が１個所である。 その他には全く



第3図　遺　構　配　置　図



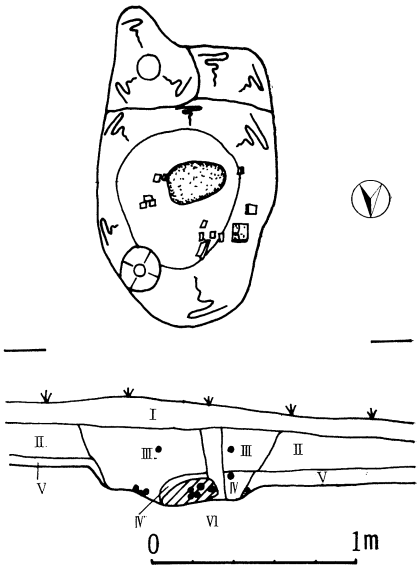
第4図　住居地内土層図

発見されず、土器片も散布が少なく、当初全面に発見される予定で路線に直交する様に巾５mのグリッドを設定し、巾２mトレンチを１０m間隔で発掘した。西側No.１３６から1.２.３～の数字を、南からA.B.Cのアルファベットを与えて各グリッドをA１グリッドという様に呼んだ。又、巾２mのトレンチを設置したグリッドは東西に分けた為、○○東グリッドと呼称した。

遺構は１号住居がC２、D３東（E）とC３、D３西（W）にかかって発見され、２号住居はC３西（W）に発見された。又土壙は、C１西（W）南側にある。

１号住居（第３図）

本住居は北西傾斜面に造られている為、南側はプラン確認ができたが、北側は攪乱により範囲が明確ではない。しかし幸なことに、埋甕炉が２基発見され、北側の炉は貼床下に存在した為に時期決定がで



第５図

きた。 2号住居は1号住居よりも新しい時期の入口部埋甕をもつものであるが、本来であれば、この2号の方が良好に残存しているはずであろうが、堀り込が浅く、柱穴も不明瞭である為、 1号住居の破損程度が軽かったものと思われる。

1号住居は長円形を呈する。 南北方向の推定距離は5.5m程度であり、東西5.5mを計り、ほぼ円形を呈する様であるが、柱穴の位置からは長円形と考えられ、 東壁をやや堀りすぎている感がある。柱穴は8本であるが、Pi 9は他に比べ大きく2号住居のものかもしれない。 又7.8の柱穴は2本並んでおり、拡張時の柱穴とも考えられる。 南側には不連続に周溝がめぐり、巾10cm前後である。周溝巾にピットが幾つかある。

埋甕1（po9）は住居のほぼ中央にあり、 焼土は東西50cm、南北は土器の直径である。厚さは土器内部で約10cm弱を計る。 埋甕炉2は東西南北約50cmの不定形に広がる焼土の中央に埋甕炉がつぶれている。焼土はレンズ状に堆積しており土器中央で12～13cmを計る。

2号住居址（第3図）

北側を攪乱によってほとんど破壊され、1号住居上にあった貼床は確認されなかった。 このため東西2.5m、 南北1.3mの住居南側一部しか残存しておらず、全く偶然にも埋甕が発見された訳である。 攪乱部からは埋甕と同時期及びやや新しい土器が多数出土しており、住居を想定しながらの発掘であったが、結果的には極く一部しか記録を許されなかった。 埋甕は口辺部欠損のほぼ完形土器が正位に置かれ、 その外側に更に胴部大破片がそえてあった。 前述した様にこの住居に伴う柱穴はNo.9だけであり、他には発見できなかった。

土壙（第4図）

C2グリッド南側から発見されたもので、南北1.5m、 東西0.9m堀り込みは第2層からで約40cmある。 中央に花崗岩の20×25cmの礫があり、土器は土師器甕と縄文中期土器が発見されるが土壙の時期は平安時代として良いと思われる。

（2） 出 土 遺 物

土 器 の 分 類

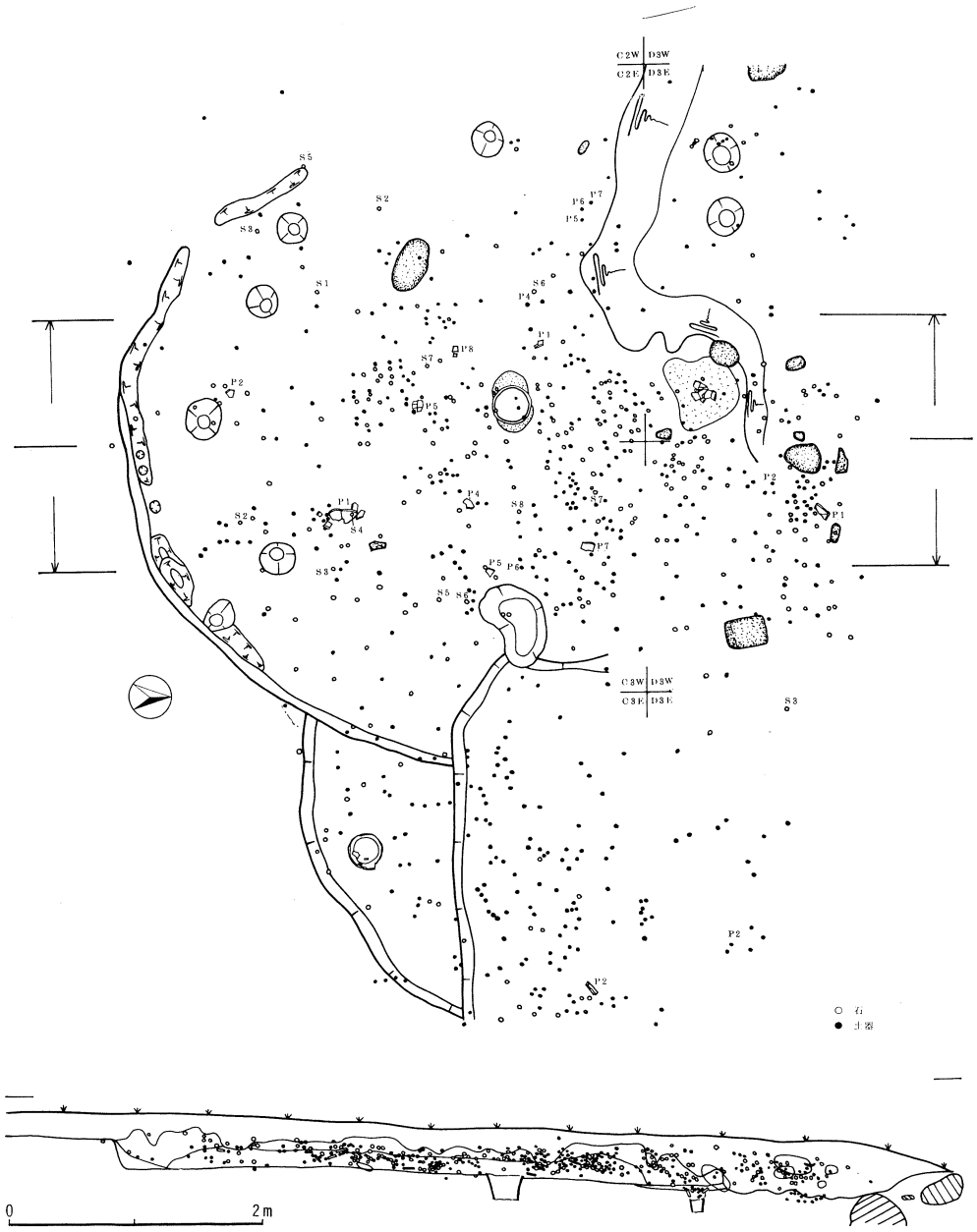
第一群土器（第7図1.2）

早期及び前期前半の土器と考えられるもので1は撚糸文が縦に施され、 口唇部はやや内側が斜になっており、早期夏島式に比定されるものと推定する。 焼成はもろく黄褐色の胎土はザラザラしている。出土地は3C東である。 2は口縁部が指で撫でられた様に無文帯があり、 その下は無節縄文が全面に施される。粒子はこまかくややザラザラしている。繊維の混入は無い。

第二群土器（第7図3～30第8図1）

縄文前期末に属する土器群で縄文地文に半載竹管の平行沈線が施されるものをA類、 条線地文にボタン状貼付文や結節浮線文（沈線文）等が施されるものを、 縄文地文も含まれるがB類とし、結節浮線文で器面を埋めるものをC類とした。

A類（3.4）


C2W D3W
C2E D3E
C3W D3W
C3E D3E
S1
S2
S3
S4
S5
S6
S7
S8
P1
P2
P4
P5
P6
P7
P8
○ 石
● 土器
0
2m

第 6 図

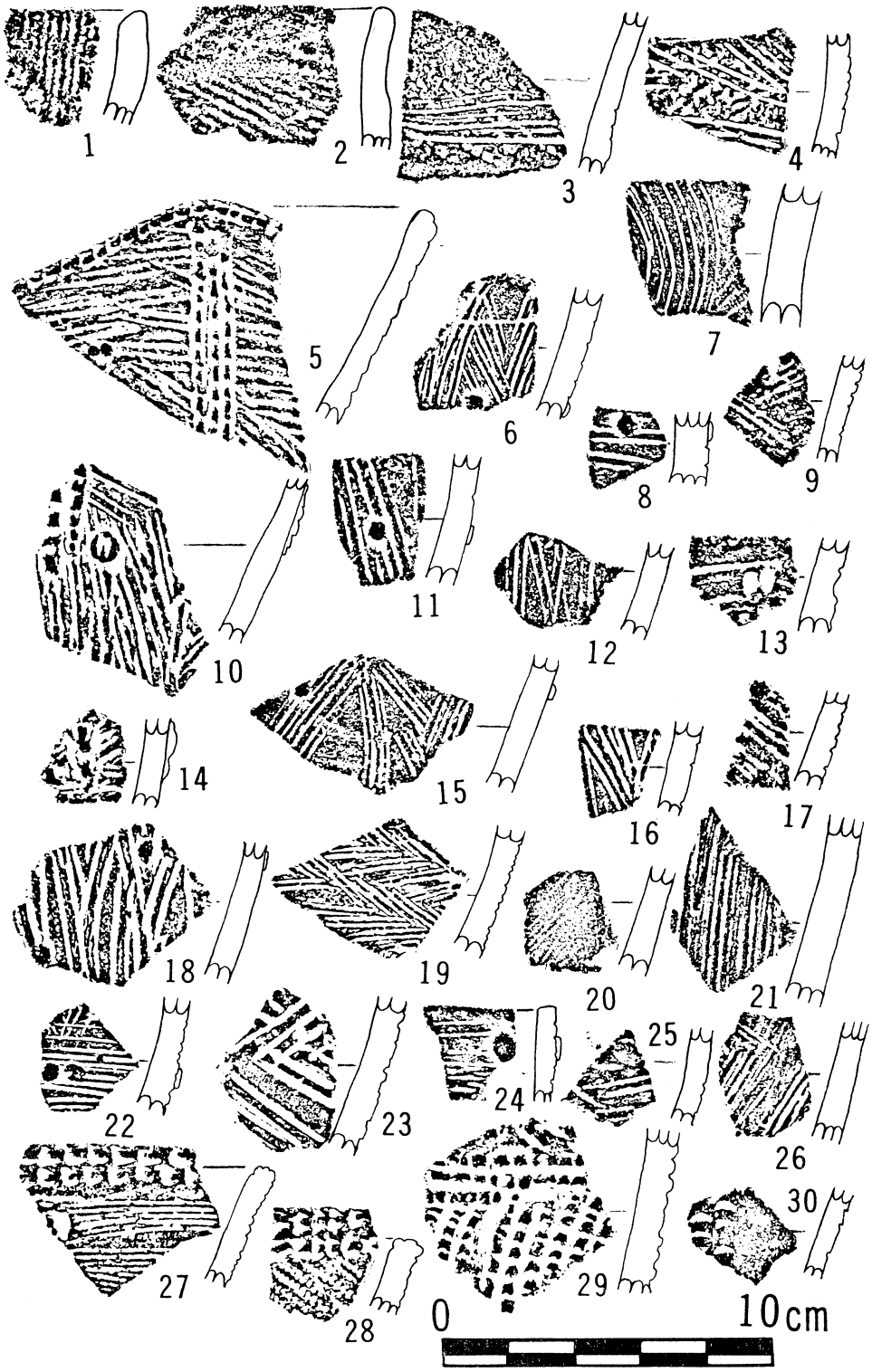
3は、荒い単節縄文R$\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\end{matrix}\right.$を施したあと半載竹管に内面を使用して平行沈線を3本施している。胎土は褐色を呈し粒子こまかく焼成はかたい。4はL$\left\{\begin{matrix}r\\r\end{matrix}\right.$の半節縄文地文に半載竹管で横あるいは斜に沈線が施され、胎土は黄褐色を呈し、金雲母を少量含むが焼成は良好である。

これらの土器は諸磯B式土器中の新しい部分に比定されると思われるもので、長野県上原遺跡三類E種(1)に近似するであろう。

B類（5～28）

条線文及び半載竹管平行沈線で地文が施されるもので、杉綾状、曲線、横あるいは縦の一定方向、不規則な方向のものにそれぞれ分けることができ、条線及び半載竹管も細いものと太いものがある。こうした異りを時間差とするよりも同一時期内のバラエティーと把えられている。

5は波状口縁の土器で、口唇部外側に結節状沈線文が施され、頂点から3条の結節沈線文が底部に向って垂直に施文される。地文の半載竹管平行沈線は乱雑に器面全体に描かれる。胎土には石英粒、黒雲母等を含みザラザラしているが焼成は良好で赤褐色を呈する。口縁部に結節沈線文が施されるものとして第7図27.28があるが、いづれも口唇部内外陵に施され、口縁は平縁と推定される。6は条線による杉綾文が施され小さなボタン状貼付文がある。石英や雲母粒子が混入され褐色を呈し焼成も良好である。7は半載竹管で曲線が描かれており、長野県北信地方に分布する桜沢式(2)の影響を受けている様であるが、桜沢式の沈線が明確であるのに対して、やや浅い沈線で間隔もまばらであり、曲線構成も雑であるところから桜沢式と異る点も多い。赤褐色を呈し粒子もこまかく焼成良好である。8は半載竹管の平行沈線が横方向に施されボタン状貼付文があり、赤褐色を呈し焼成は良好である。9は杉綾状に竹管の平行沈線が施され、赤褐良で焼成はもろい。10は細い半載竹管で口縁部に近い方は斜に、胴部は縦方向に平行沈線を器面全体に施し、上部縦に2本の結節浮線文を貼り付け、ボタン状貼付文上に半載竹管の刺突が施される。暗褐色で焼成は良好である。11はややまばらな半載竹管平行沈線が施され、ボタン状貼付文がある。石英及び金雲母を若干含み赤褐色で焼成はややもろい。12の半載竹管もまばらで不規則である。13は横方向に竹管文が施され、棒状具で並んで刺突される。これは27と類似するものである。14は竹管文が不規則に施され、結節状浮線文が縦に施される。黄褐色で粒子こまかく焼成は良好である。この結節浮線文は粘土が太く、竹管の押引によって粘土がはみ出しているところが特徴である。15は半載竹管文を不規則な杉綾状に施し、ボタン状貼付文がある。金雲母を若干含み褐色であるが粒子がザラザラしている。16は不規則な半載竹管により17は斜方向に竹管文が施される。18は縦方向の不規則な竹管文上にボタン状貼付文が施される。19は杉綾状に横方向の細い竹管文が地文とされる。焼成良好で褐色を呈する。20は条線様の竹管文が施されるもので、第8図1と類似する。21は条線を縦に施し、黄褐色を呈し焼成良好である。22はボタン状貼付文を2個並べてあり、地文の竹管は横走するが縦あるいは斜にも施される。暗褐色で焼成良好である。23はやや太い竹管で強く杉綾状に描いたもので、間隔も広く他と調子を異にする。24は平縁の口縁と思われ、ボタン状貼付文があり、竹管は横走する。26はやや雑な杉綾状の竹管文が施され暗褐色を呈する。27は前述した様に口唇部内外面は結節沈線文が28とともに特徴となるもので、27は横方向の条線、28はR$\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\end{matrix}\right.$の縄文が施されている。これらはいづれ


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0
10cm

第 7 図

も諸磯C式に属するものとして良いであろう。

C類（第7図２９）

結節状浮線文の直線及び曲線によって器面を埋めるもので、 暗褐色粒子こまかく焼成良好である。十三菩提式に比定されるものである。

第三群土器（第８図）

半載竹管平行沈線を規則正しく直交させるものを主とし、 三角区画の中心を篦で削り取るもの、結節浮線文を貼付けたもの等が含まれる。

A類（第８図２．３）

波状口縁先頂部から２本の結節浮線文が縦に貼付けられている赤褐色の土器で、 口唇部には篦で刻が入れられ、 頂部は大きな刻が対に施される。３も２と同じ胎土であるが結節浮線文がやや間隔がつまって施されている。

B類（第８図５～１４）

半載竹管の平行沈線によって縦と横に規則正しく施し区画するもので、 籠目様の構成から踊場式に比定される場合もあるが、 籠畑式として十三菩提期に平行させることもある(3)。

５～１２は同一個体の可能性があり、 １３は半載竹管を器面に強く押しあてて引いた沈線で器面を美しく飾るもので、前掲土器と種を異にする。 １４は縄文地文の土器である。

C類（第８図４）

平行沈線で山形区画を行ない、 中心の三角無文部をヘラで削り取ったもので灰褐色を呈し粒子は細かく焼成もかたい。

D類（１５～１７）

半載竹管の平行線によって籠目文を施すもので焼成良好暗褐色を呈す。 こうした籠目文は梨久保式に多用されているとされるもので、籠畑式にも見られる。

E類（第８図１８）

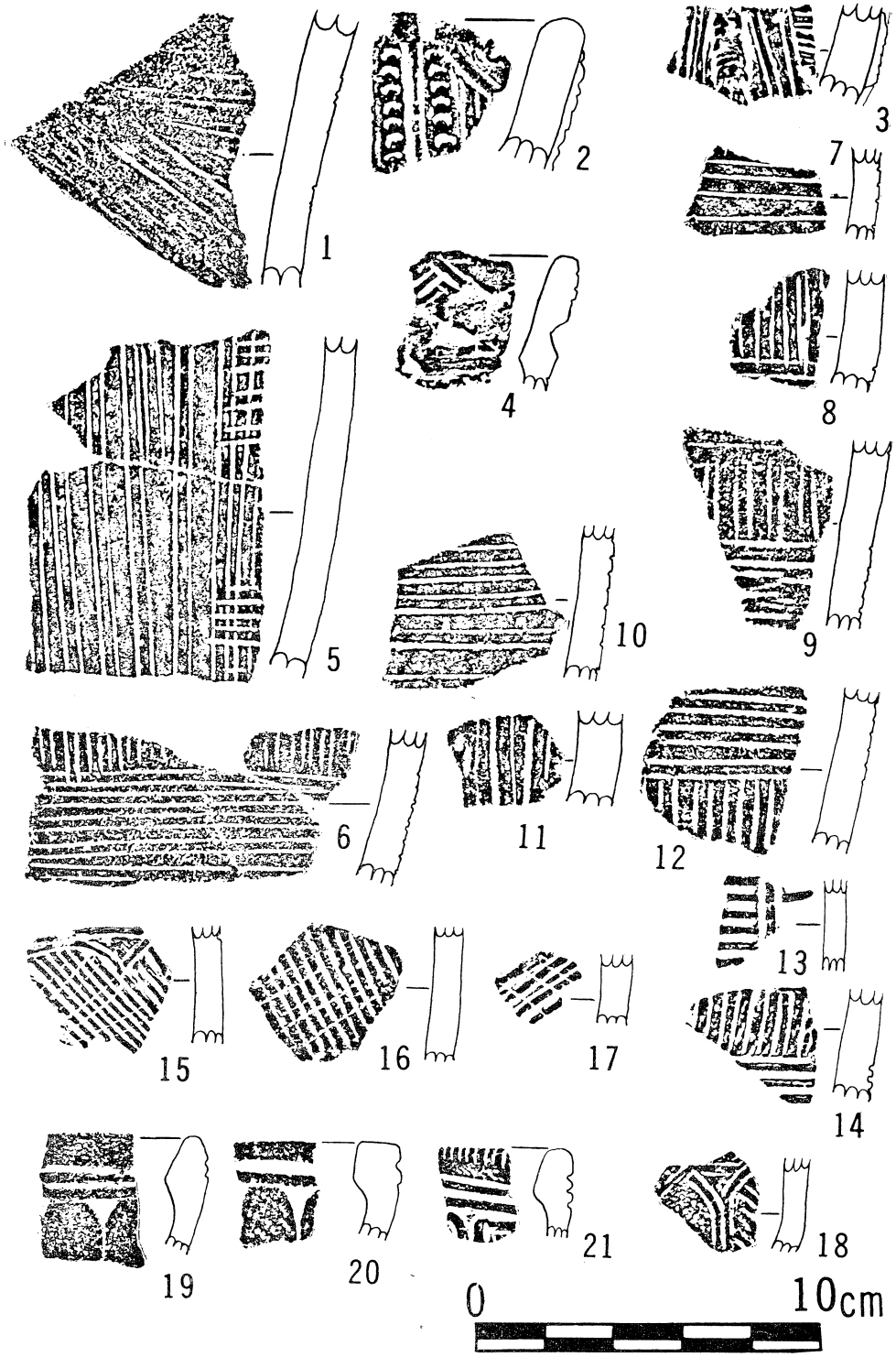
R$\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\end{matrix}\right.$の縄文を半載竹管Y字文で区画しているが、縄文の区画と無文の区画が並べられている。

F類（第８図１９～２１）

いづれも口縁部破片で、１９は口縁下に２本の半載竹管による半隆線を引き、 その下にY字形に粘土をヘラで削り取っている。２０は口縁下１本で、その下にY字に陰刻がなされ、地文はR$\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\end{matrix}\right.$の縄文が軽く施される。 胎土は赤褐色を呈し、 金雲母等小砂を含んでザラザラしているが焼成は良好である。２１は口唇部に半載竹管で連続爪形文が施され、 口縁に平行する半隆線の下に同じ隆線の区画がある。

第四群土器（第９～１５図）

所謂五領ヶ台Ⅱ式の新しい部分に属する土器で、 本遺跡出土の中心的なものである。１号住居址埋甕に使用された土器及び覆土中より大部分が出土しているが、 無文地文と縄文地文に大別され、無文のものは半載竹管平行沈線文が施される。 縄文のものは結節縄文が縦にあるもの、又は沈線が施されるものに分けられる。 これらはいづれも胎土に金雲母を多量に含み、器外面は赤褐色あるいは暗褐色を呈し、焼成はもろいものが多い。



第 8 図

A類（第９．１０図）

１号住居址炉埋甕土器を代表とする土器群で、口縁部が外反し胴部との接合部がやや屈曲し、胴部は弓状にしぼられて底部が張出す土器で、口唇部にヘラによる列刻文が施され、その下には半載竹管による平行沈線で縦方向に一周させるものと、部分的に施されるものがある。第９図３～８、１１は周囲に施され、１０、１２、１４、１５は部分的に幾つか施されるものである。１７～２７は頸部に横走する平行沈線が幾条か配され、１４は結節状浮線文、１７～１９は鋸歯状文、２０、２１は結節状浮線文を頸部にめぐらす。１１、２４は平行沈線２条の間に波状の平行線を施すものである。

２８～３８は胴部文様のあるもので、縦方向の文様の他に曲線でU字形文様等の平行線を描いており、胴部の曲線文様はこの時期に特徴的であるが、この文様が次の時期にどの様に変化するのか不明確である。この類例は八王子西野遺跡出土品中(4)に見られるもので、本県では小淵沢町上平出遺跡(5)にも出土している。

４４～４９は上記した土器の底部で張出底と、すぼまる二種類の底部が見られるが、底部に幾条かの平行沈線をめぐらすものがある。４０～４３は前述した土器と異なり、平行沈線と連続爪形文によって構成されるもので、黒褐色を呈し、器肉も薄く焼成のもろい土器である。小形浅鉢形土器片と推定される。

B類１（第１１図１～１３）

縄文地文の胴部に縦の竹管文が施されるもので、１はL$\left\{\begin{matrix}r\\r\end{matrix}\right.$の単節縄文地文に半載竹管平行沈線を２条描き、その間に同竹管で波状の沈線が施される。１～３、５～９、１２は縄文L$\left\{\begin{matrix}r\\r\end{matrix}\right.$、４、１０、１１がR$\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\end{matrix}\right.$の単節縄文が施されており、１３は無節縄文で鋸歯状文が縦に強い力で刻まれる。

B類２（第１１図１４～１９、第１２図１）

縄文地文に結節縄文が縦に施されるもので、横方向のものは見られない。１４はL$\left\{\begin{matrix}r\\r\end{matrix}\right.$の縄文で１５～１９はR$\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\end{matrix}\right.$の単節縄文である。第１２図１は浅鉢形土器の把手部でR$\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\end{matrix}\right.$の縄文が施され、把手は内外面とも「の」字形に粘土紐を貼り付けている。

B類３（第１１図２０～２４、第１２図５～７、９）

縄文地文上に棒状施文具で単線の沈線により文様を構成するもので、２１、２２は二重の弧を横に連続させている。第１２図６、９は口縁部縄文帯の下に一本の縄文を口縁と平行させ、半載竹管の押引き沈線を並べる。

B類４（第１２図２～４）

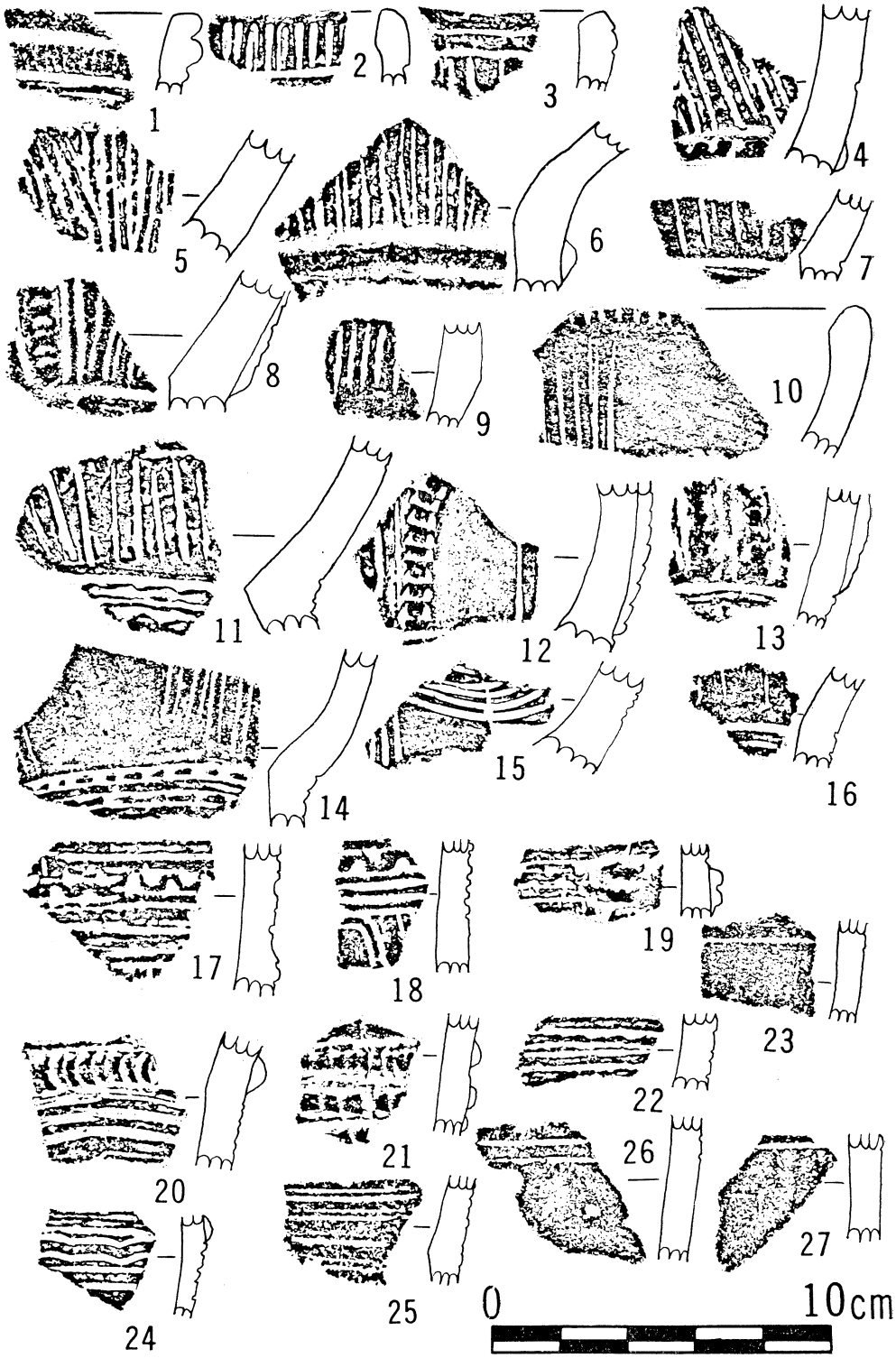
口縁部縄文帯下に無文帯のあるものを一括した。

B類５（第１２図８、１１、１３、１４、第１３図１～２１）

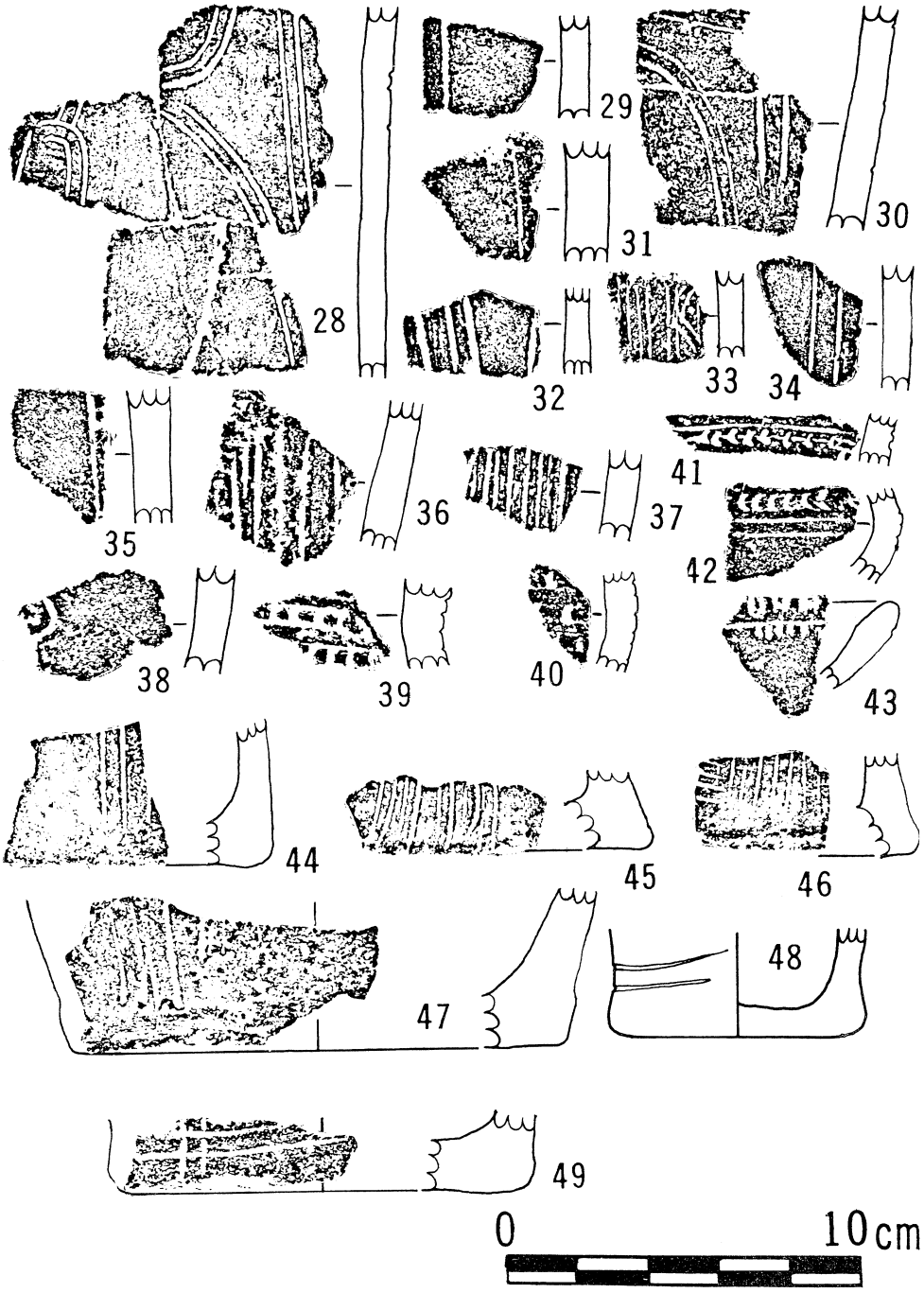
縄文地文のみのものを一括した。第１２図１１が無節縄文を不規則に回転押捺させたものであり、他は単節縄文が施される。

C類（第１４、１５図）

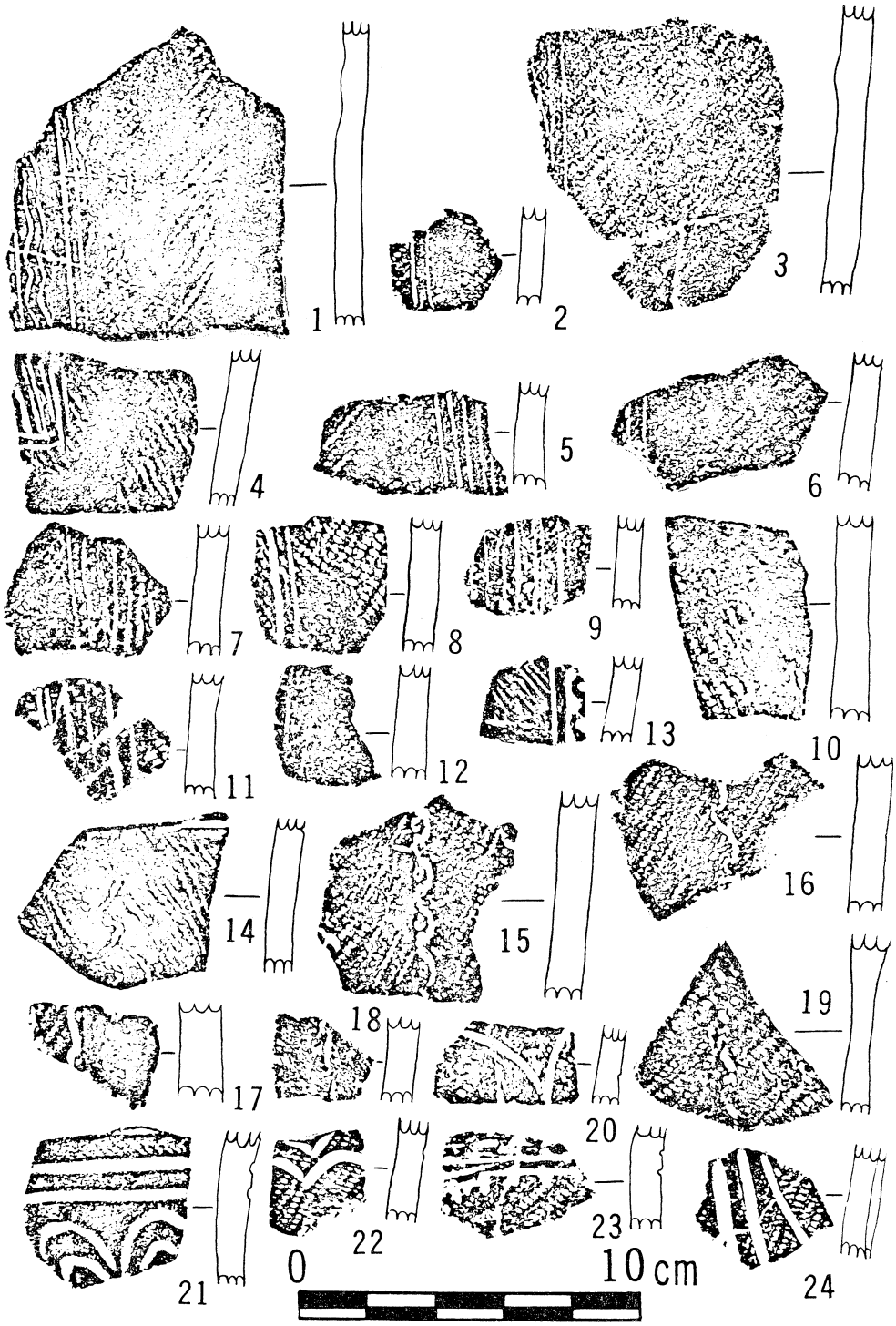
無文の土器を一括したが、粘土紐貼付けのあるものを１種（１～４）、口縁部に刻が施されるものを２種（１９）、内面に縄文が施され、口縁部と平行に押引沈線が一条施され、外面は無文の２３を３種とし、無文のみのものを４種とした。勿論ほとんどが破片であるため、完形土器に復元した場合


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
10cm

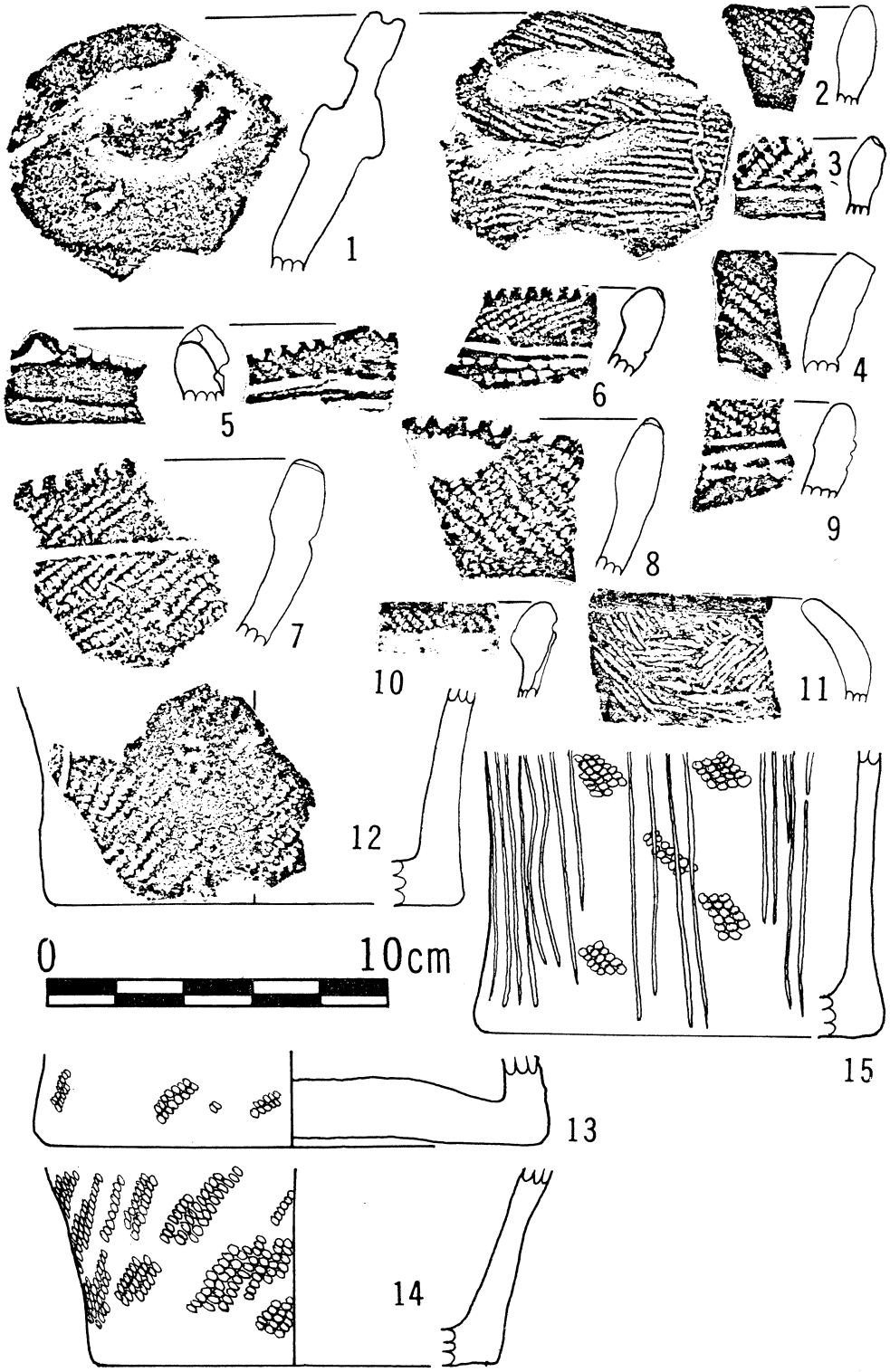
第 9 図



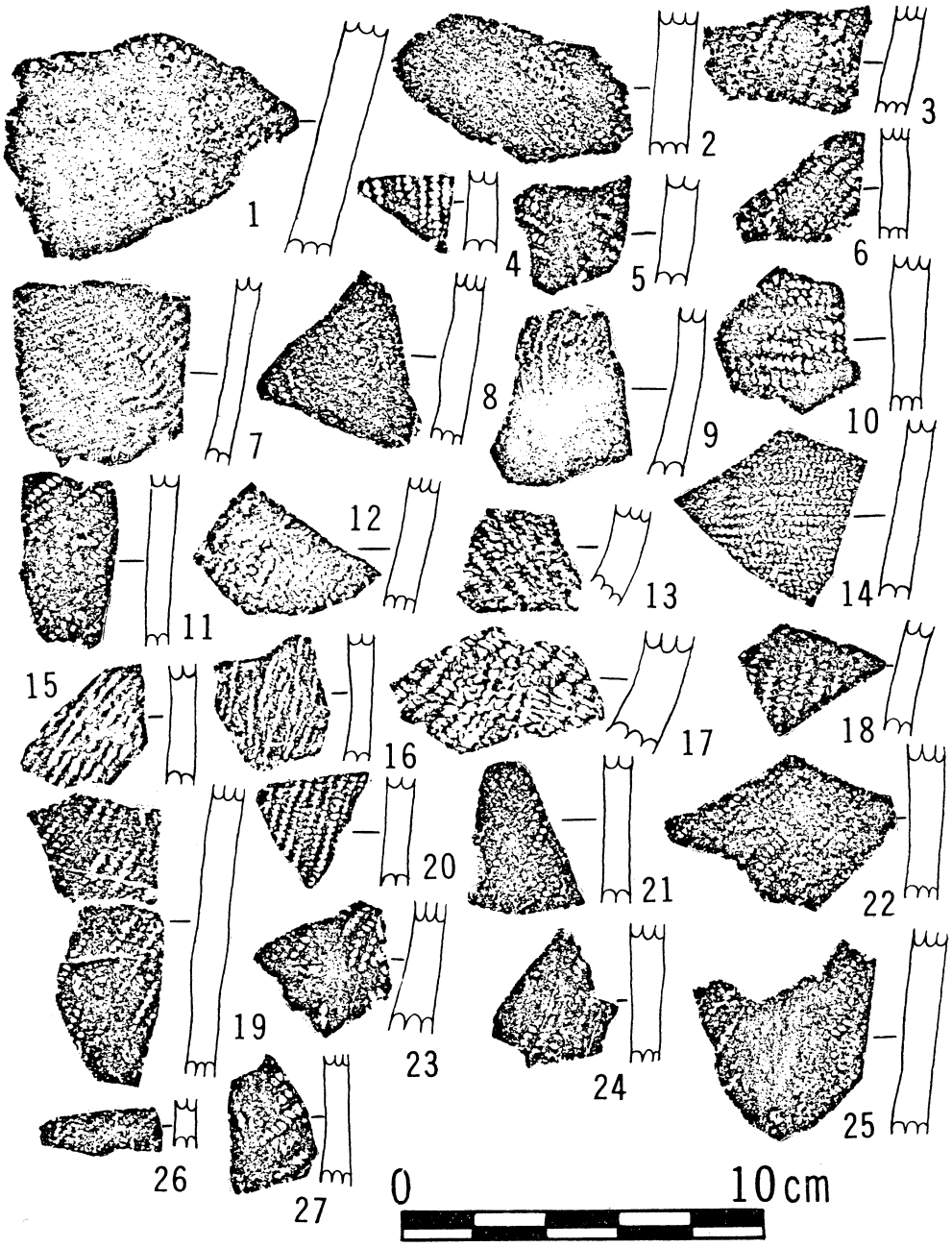
第１０図



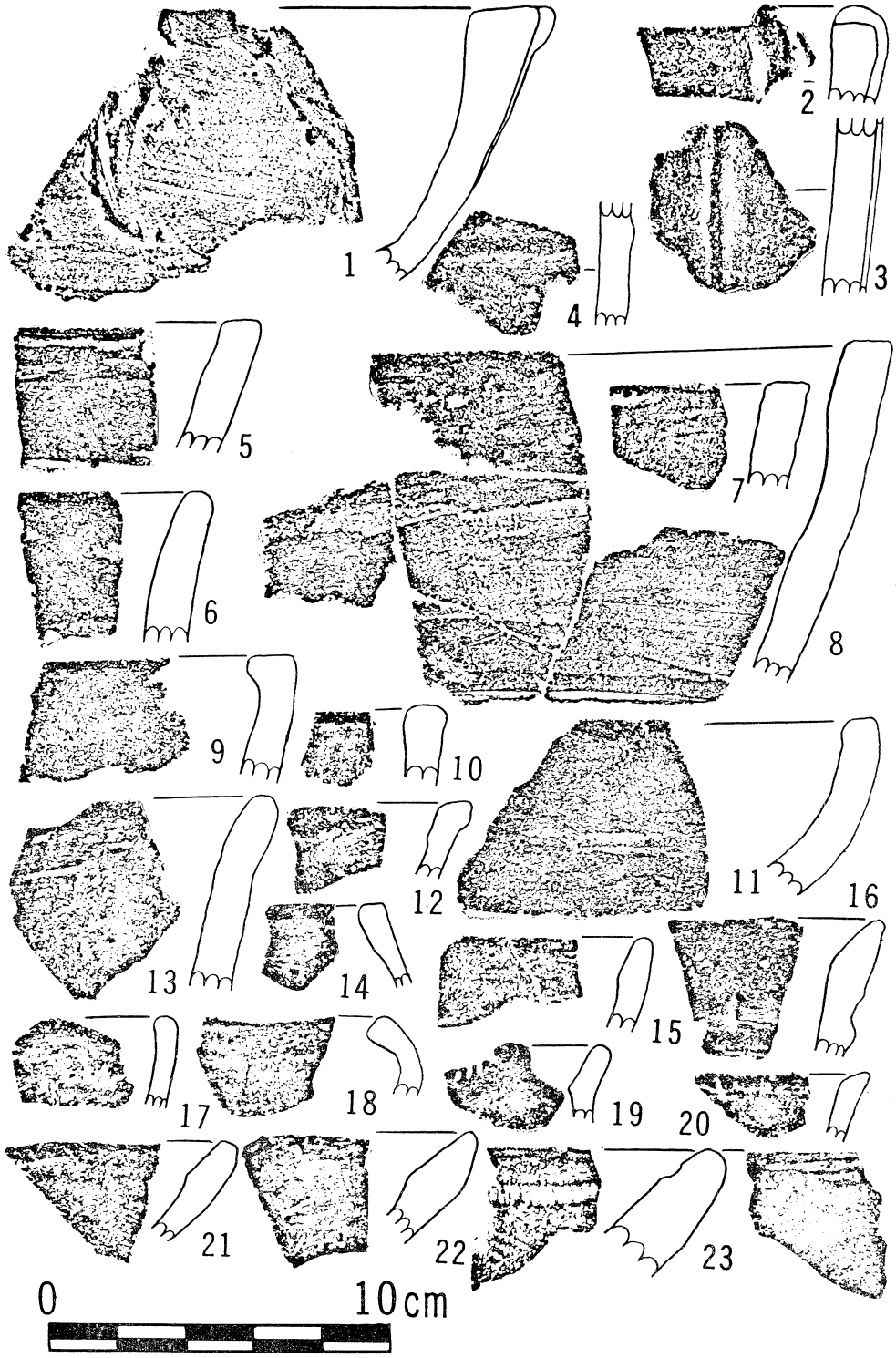
第１１図



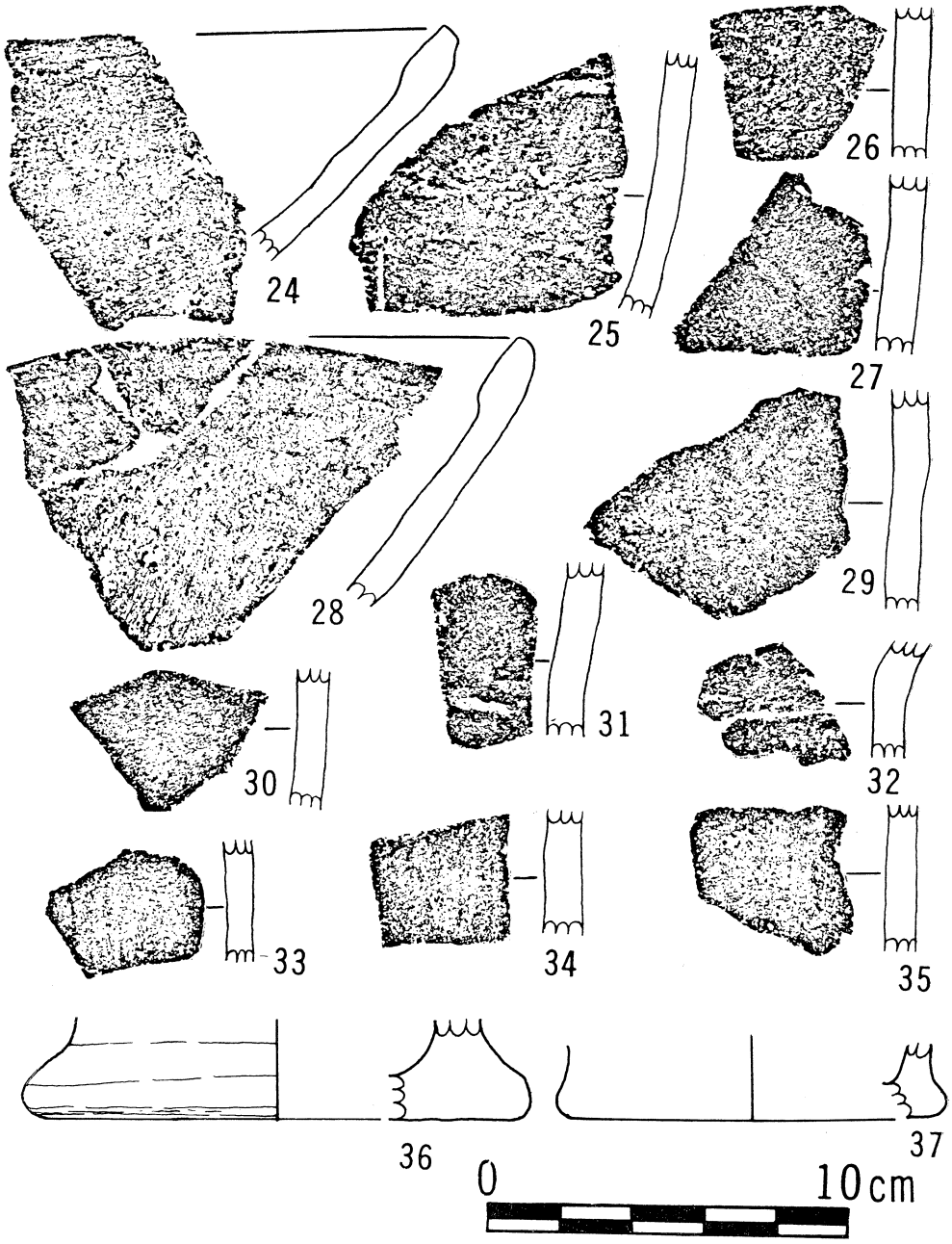
第１２図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
10cm

第１３図



第１４図



第１５図

には頸部や胴部に文様が施されるものが多いと思われる。 口縁部断面にそれぞれ特徴があり、１、２５、７、８等は水平にヘラで切り離したままの状態に近い口形をしており、 ９の様に内面に胎土が強く張り出すもの、１６、２０は口唇が尖るものであり、 ２１、２２、２４、２８等の浅鉢は口縁部内面がやや厚くなっている。これらの特徴が器形に制約されたものであるかは資料的に不明である。 ３６は底部張出が特異である。

第五群土器（第１６図）

通称角押文と言われる半載竹管の押引連続文で、横方向の長円形区画を行ない、 その中央に鋸歯状に同施文具で文様が施されるもので、 長円形区画を隆帯貼付で行なうものもあり、八ケ岳山麓で狢沢式と呼称されている土器と考える。 角押文の巾の広狭及びその間隔について差異が認められるし、隆帯上のヘラ刻みにも種類の差があり、同一個体と考えられない。

第六群土器（第１７図）

所謂勝坂式期、即ち中部地方での井戸尻式に比定される一群であって、 ヘラによる強く深い沈線と隆帯文、及び隆帯上の刻文に代表され、縄文地文のものは密でしっかりと施文されている。 １１は補修穿孔があけられ、１６は藤内期に近いものであり、 １８は届曲底をもつ勝坂期の典型的な土器胴部破片である。２２は浅鉢である。

第七群土器（第１８～２１図）

この群は所謂加曽利Ｅ式、 中部地方での曽利式に比定されるものであるが、曽利式編年に従って類に分けた。

Ａ類（第１８図）

大型把手の付けられる筒形胴部に、 縦方向の強い半載竹管平行沈線文に加えて、粘土紐の隆帯にヘラで刻みが施されるもので、 曽利Ⅰ式と言われるものである。一括土器と考えられるが破片は発掘した遺物中のすべてであり、若干の他の破片も含む。

Ｂ類１（第１９図）

半載竹管の平行沈線又は条線地文に粘土紐が貼付けられるもので、 口縁部（１、２、３、４、５、７）等の様に内湾した口縁上面にまで文様がおよぶ。 口縁は外傾し、頸部がくびれ胴部はやや肩をもって膨み底部に直接的にすぼまる器形のものである。 頸部には６、１２、１７～２０、２７等に見られる様に粘土紐が貼付けられ、波状を呈するものと直線的なものがある。

Ｂ類２（第２０図１～８）

縄文及び撚糸文地文に粘土紐を貼り付けているもので、 １、４、６の様に頸部と胴部懸垂文の貼付けがなされるものと、２、３、５、８、７の様に口縁部を孤状に区画したり、 胴部に渦巻文を施すものがある。

Ｂ類３（第２０図９～２８）

縄文及び撚糸文地文に半載竹管平行沈線で強く描いた直線及び懸垂文が施されるもので、 ９～１１はおそらく一括土器であろう。 １０は口縁に半円形に平行線をひき、連結部に渦巻文が配される。半円内には半載竹管の内側先端を用いて刺突を二列施している。 １５～１９、２１、２４、２５は細い密な単節斜縄文が施され、懸垂文も半載竹管平行沈線の直線と、 単線の波状懸垂文が交互に施され

る。 ２２は横に長い方形の区画が単線でなされ、ＬＲの単節縄文地文である。２７は平行線で口縁を半円形に区画し、内側に丸棒状器具で刺突されるものである。

Ｂ類４（第２１図１～２３）

半載竹管あるいは条線によって地文を施した後、 粘土紐を貼り付けてその両側に強く沈線をひくもの（１～３、７）と、巾広のヘラ、 あるいは指頭２本で強く器面を押しながら引くことで胎土を隆起させ、文様を描くものとに大別できる。 前者は一般的に後者よりもやや古いとされているが文様上一括した。

Ｂ類５（第２０図２９、３０）

無文地に平行沈線と刺突文が施されているもので３０のものは同図１０、２７と共通するものである。

Ｃ類（第２１図２４～３４）

縄文及び撚糸文地文のみを一括した。 おそらく他の文様と組み合わさって類の異なるものに含まれるものも多いと思われる。３１は浅鉢であろう。

Ｄ類（第２２図１、２）

無文に沈線で文様が描かれるもので、 焼成胎土ともに良く沈線も深く力強い。

Ｅ類（第２２図３～１２）

無文の土器を一括した。

Ｆ類（第２２図１３）

文様構成上はＢ類５に含まれるべきであるが、 典型的なハの字文を有する曾利Ｖ式のために分けている。

一括土器（第２３、２４図）

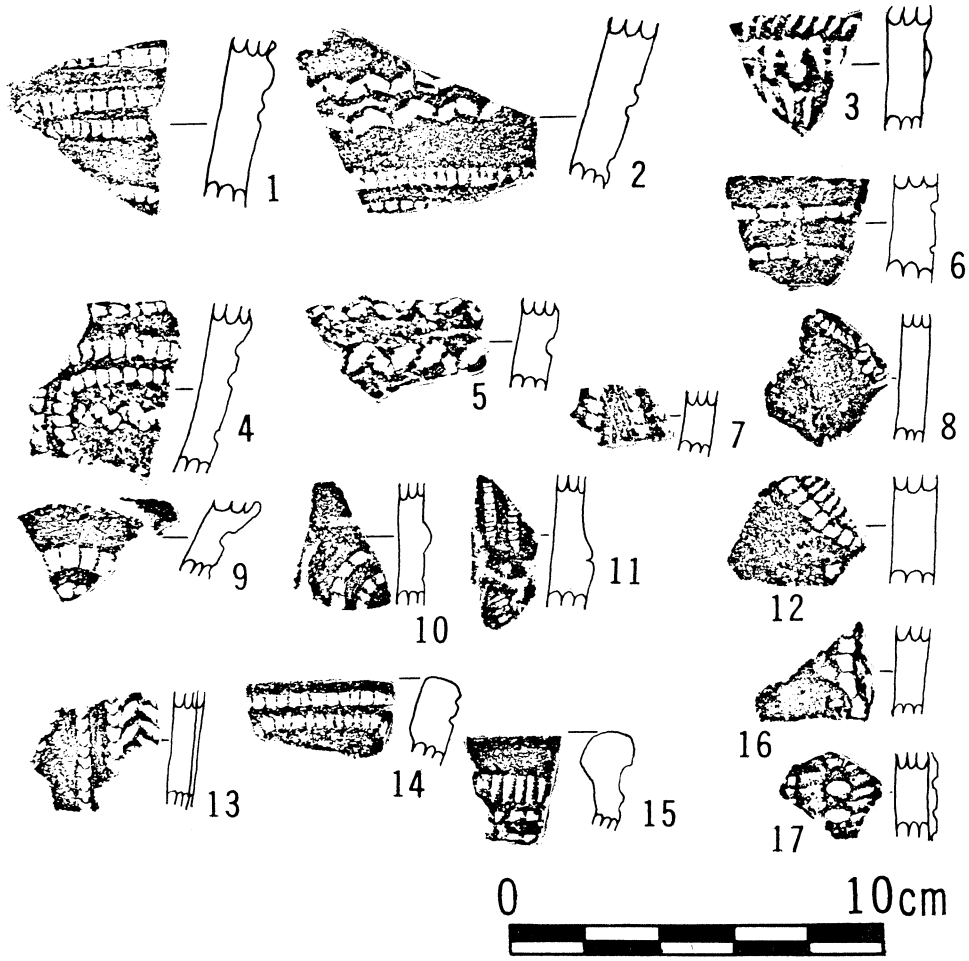
埋甕及び覆土中の土器の復元可能土器及び図上復元の土器をとりあげてその大略を説明してゆきたい。

第２３図にあげた土器は１号住居址埋甕炉土器１で、 第９図、第１０図にあげた第四群に比定され、五領ケ台式でも新らしい部分に属すると考えられる。 胎土は赤褐色を呈し、金雲を多量に含んでザラザラしており、もろい感じの焼成である。 口辺部と胴部の縦の平行沈線は半載竹管によるもので、 頸部には二条の横走する結節状沈線文が施され、その間には上下交互に細い棒状工具で刺突されている。胴部は半載竹管で四区画されるが、 口線部粘土渦巻文を配した背面にあたる胴区画にＵ字の先端を連絡した様な文様が斜に施され、蛇の頭とシッポを表現したかの感がある。

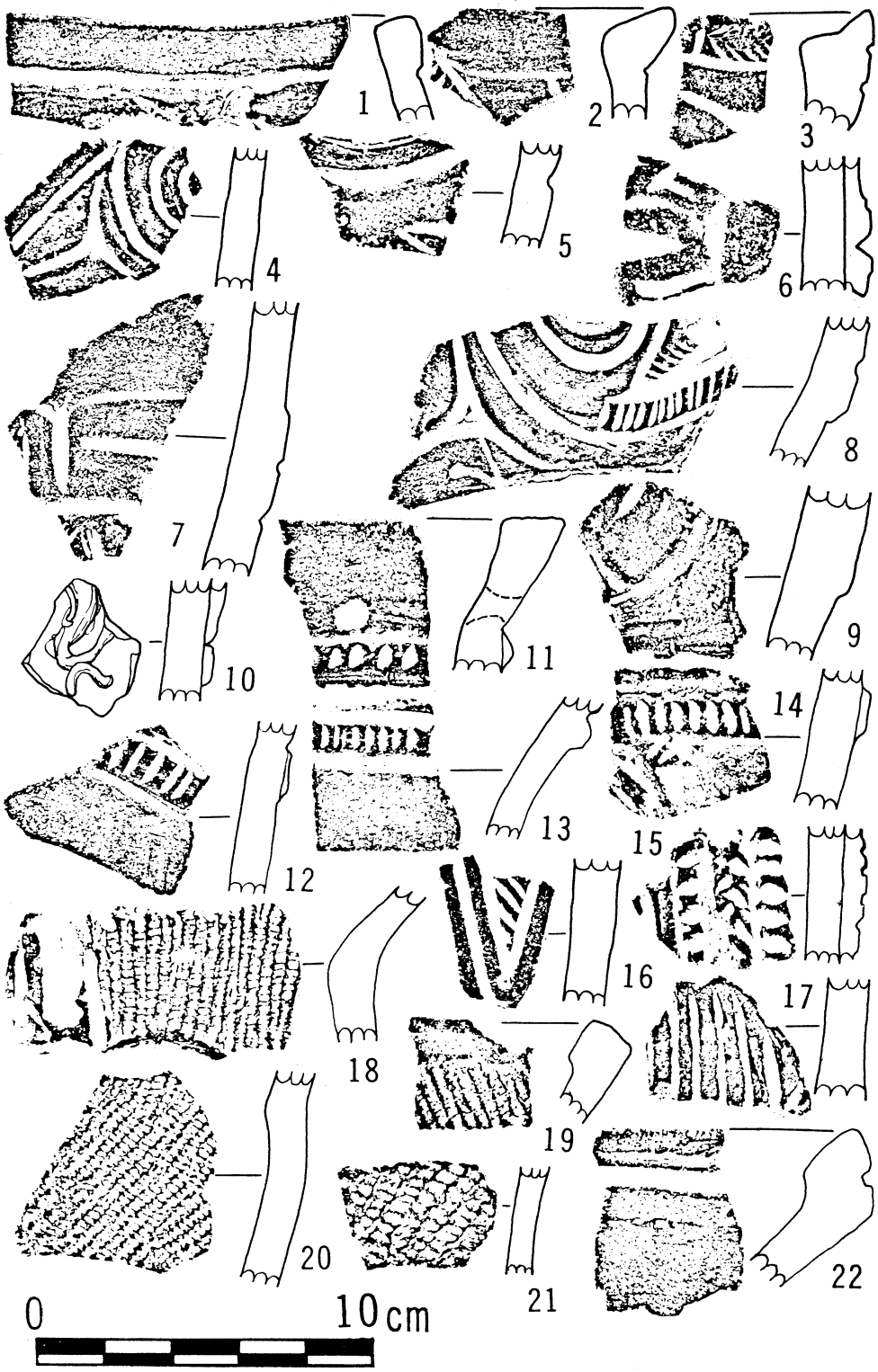
第２４図２は１号住居埋甕炉土器２であって、 この土器は胴部下半一周と頸部一部が残存しているにすぎない。炉の造り換えに際して上半を破壊し貼床をしたものであろう。

土器は前述土器と同様第四群に比定される。 胎土は褐色で金雲母を多量に含みザラザラしている。胴部縦の半載竹管平行沈線束は胴部を８区画しているが、 図上の正面が対で４本（ただし沈線が一部重複）他は２本、３本と交互に半載竹管の内側を使用して平行線がひかれている。

第２４図１は１号住居覆土中より出土したもので、第四群Ｂ類ａ種としたもので、 ＬＲの単節斜縄



第１６図



第１７図

文がまばらに施され、口縁は波状を呈すると推定される。 口唇には半載竹管の内側で連続押引文が施され、口縁に沿って沈線が一本めぐる。 頸部に粘土の貼付と横走する三本の沈線、そこから垂下する沈線が施されるが、破損部が多く全体を観察するには困難である。 胎土は黒褐色に近く、小砂、金雲母を多量に含んでいる為ザラザラしている。

同図３も１号住居南側覆土中から出土したもので深鉢形を呈し、 波状口縁をもつが、頂部にはヘラで４つの刻みがあり、 胴部は口縁に沿って半載竹管の内側先端を器面に対し９０度近く起こして連続刺突したものを幾条か横走させ、同様に胴縦方向に幾条も垂下させる。 又その間にヘラによって直線と波状の懸垂文沈線が施されている。 胎土には砂や金雲母が多量に含まれ、暗褐色を呈し焼成はもろい。 恐らく四群中に含まれるものとして大過ないであろうが、五領ケ台の新らしい部分にこれらが含まれるとすれば、そのバラエティーが相当広いものとなる。

同図５は２号住居埋甕で、撚糸文地文だけの土器である。 胴部の屈曲が強く七群２類中に含まれる。 同図４は５の土器の外側に埋められていた大破片で、ＲＬの単節縄文に沈線の懸垂文が施されている、２個体ともほぼ同時期の所産と考ええられる。又、胎土焼成良好で褐色を呈する。

特殊遺物（第２５図）

第１は土偶の手であり、２号住居の北側の攪乱層中より出土している。 褐色で胎土はしまり良く、器面も磨かれている。第七群に属するものと考えている。

２、３は土器破片を利用した土製円板であり、 どちらも無文で、金雲母の含有が多く、焼成もややもろいため第四群に属するものかもしれない。周囲はすりつぶされている。

又、玦状耳飾の欠損品がある。

石器（第25、26図）

本遺跡からは石鏃４点、石錐２点、凹石１点、石匙１点、打製石斧７点、用途不明石器１点の計１６点が発掘されれた。

（註）

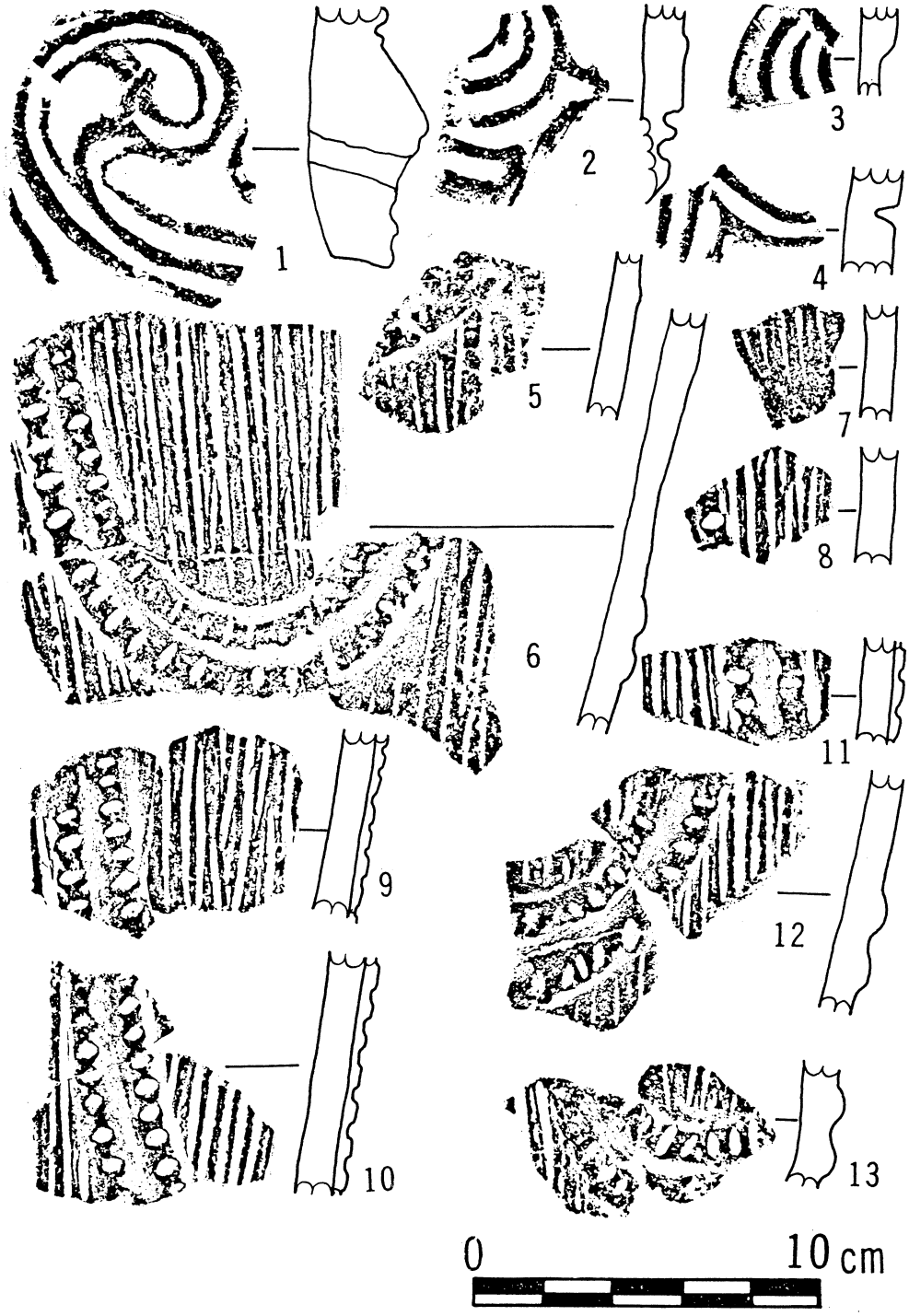
(1) 樋口昇一　１９７６「上原遺跡」

(2) 鈴木孝志　「長野県北安曇郡松川村鼠穴字桜沢遺跡」考古学雑誌４２巻２号

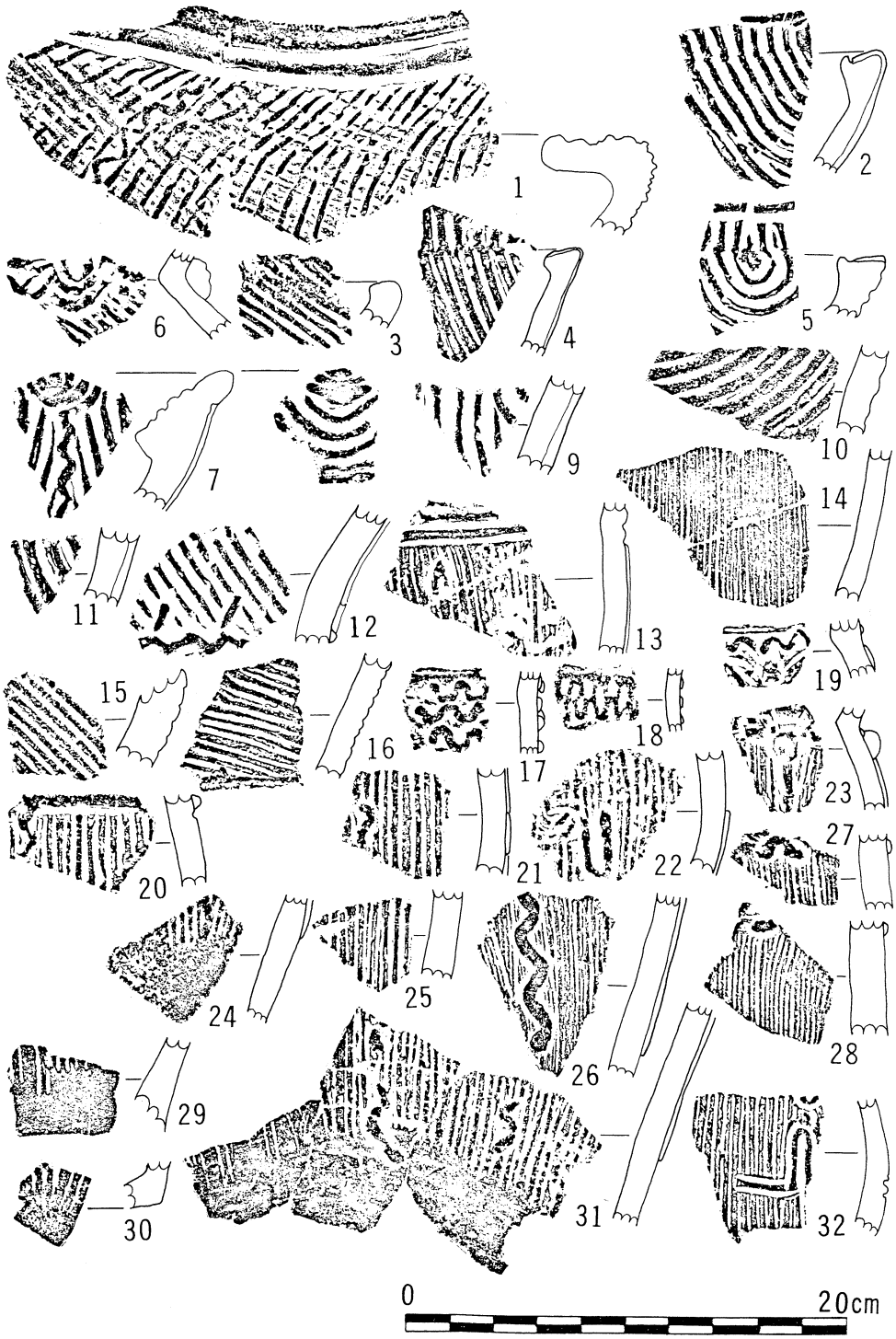
(3) 武藤雄六　１９６８「長野県富士見町籠畑遺跡の調査」考古学集刊４巻１号

(4) 横山悦枝　１９７４「八王子西野遺跡」

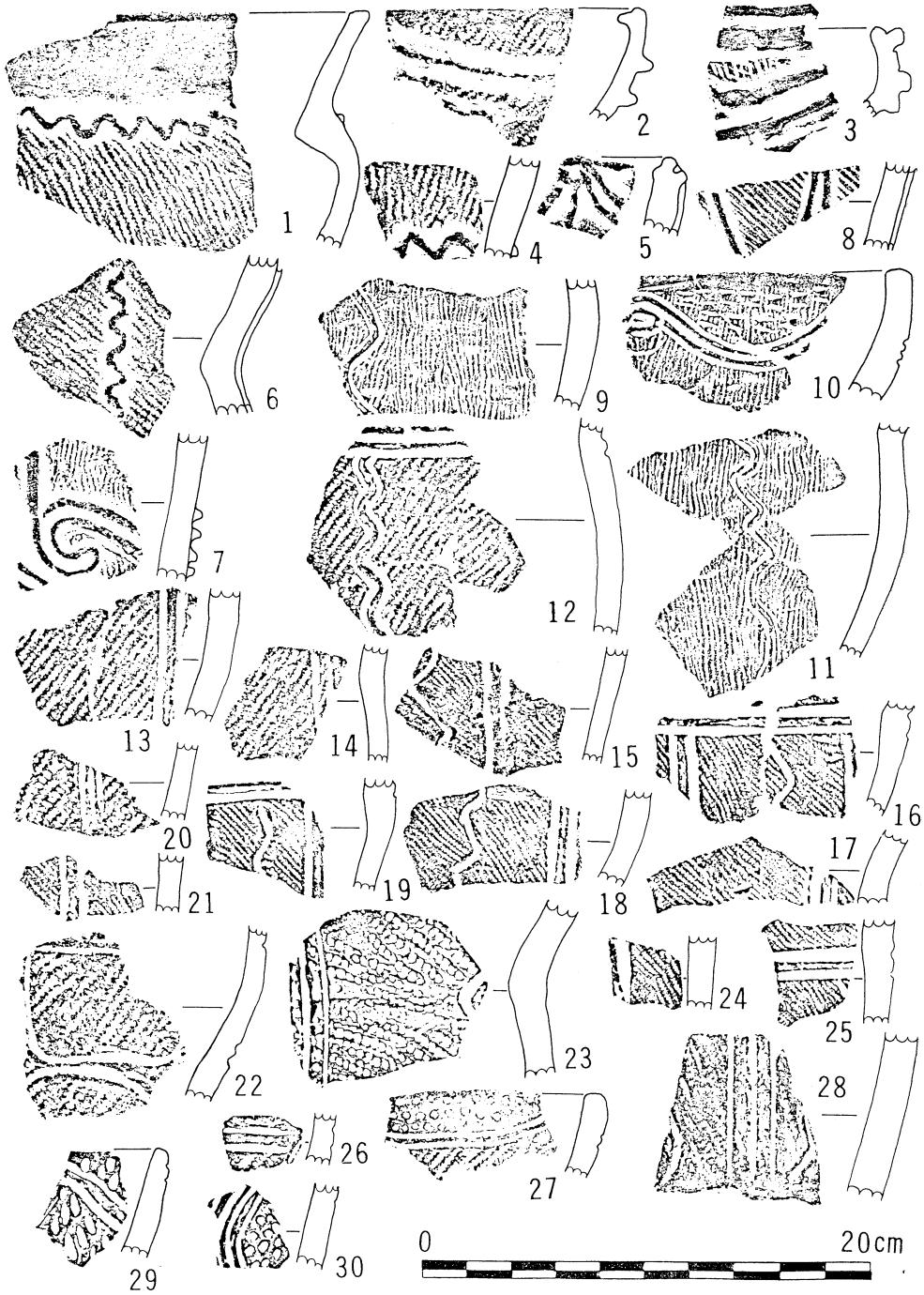
(5) 末木　健　１９７４「山梨県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書」（小淵沢町地内）山梨県教育委員会



第１８図


1
2
3
4
5
6
7
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0
20cm

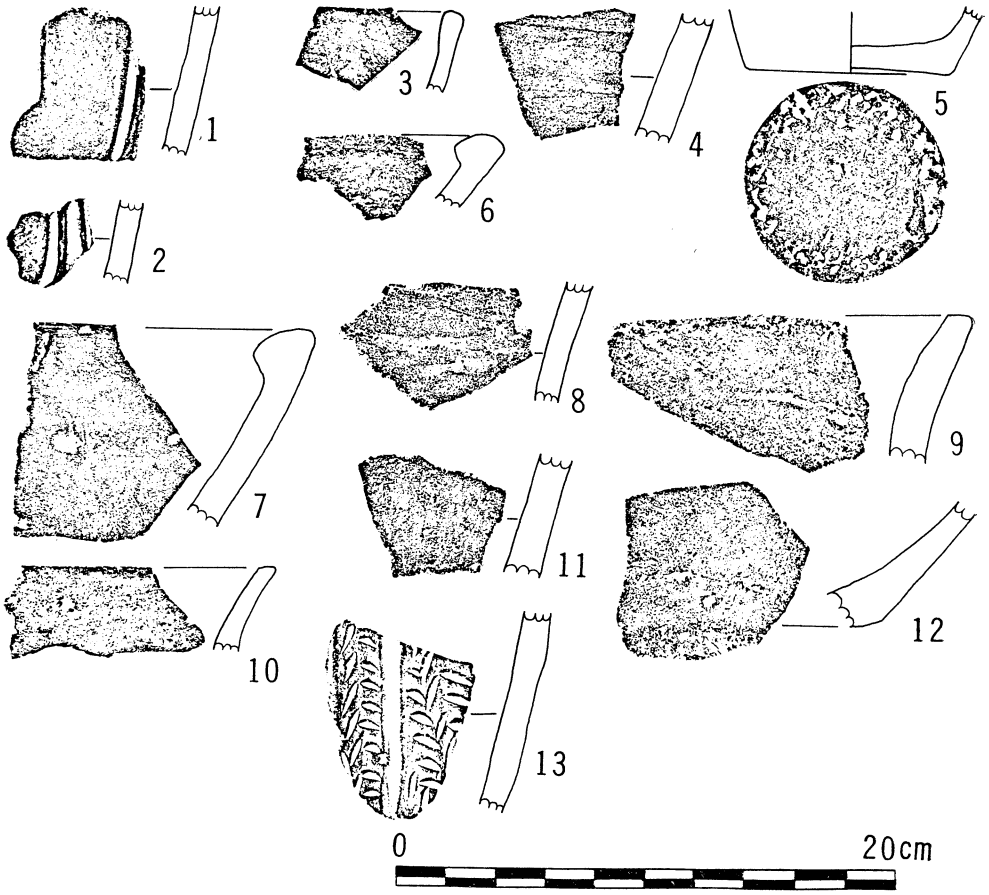
第１９図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0
20cm

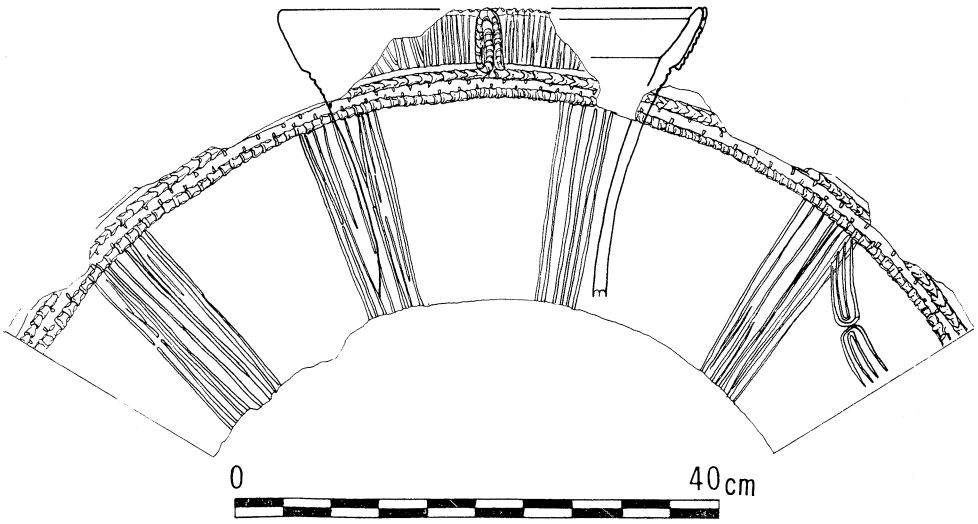
第２０図

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
0
20cm

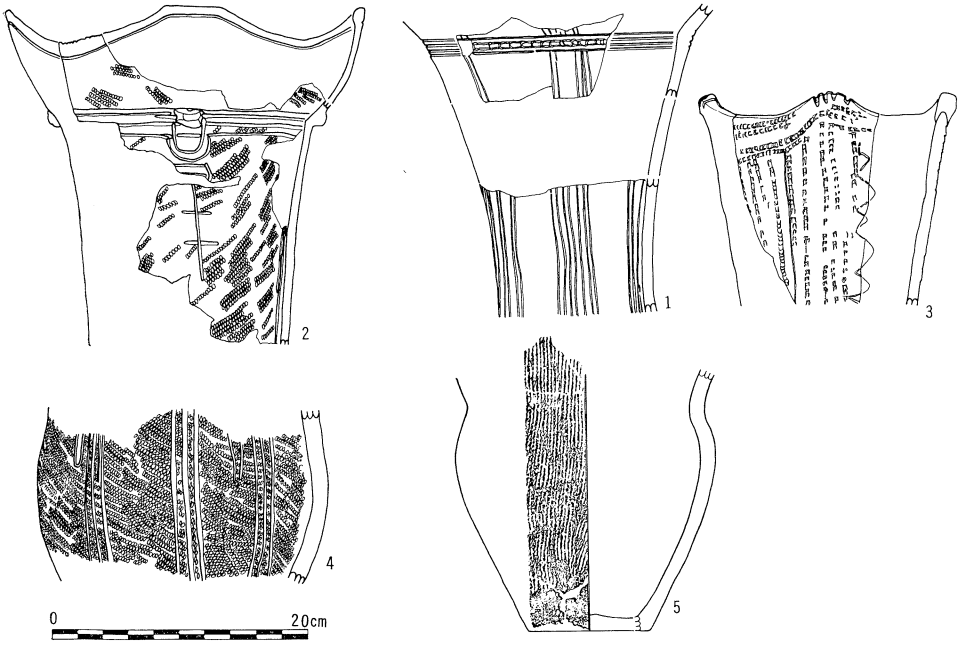
第２１図



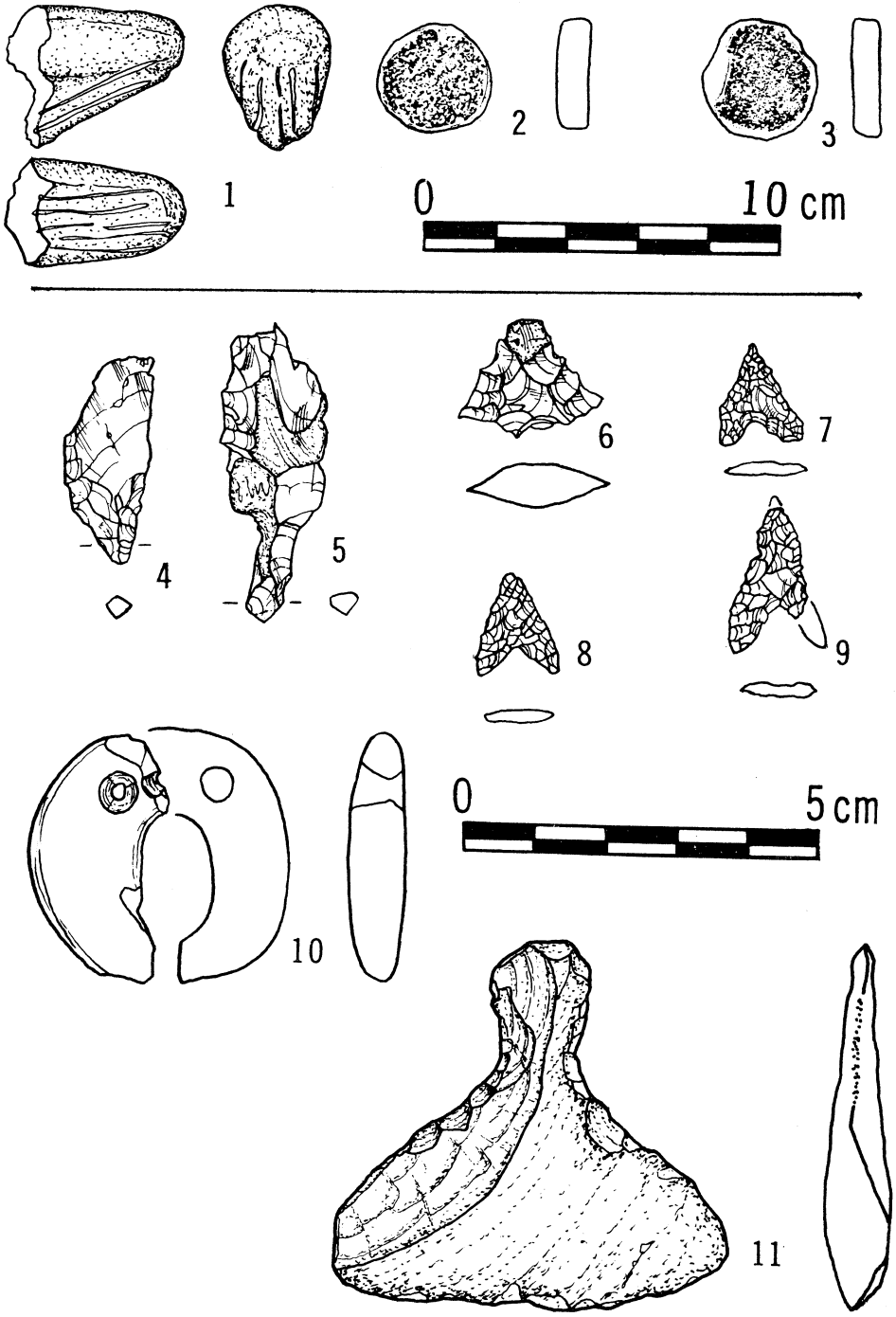
第２２図



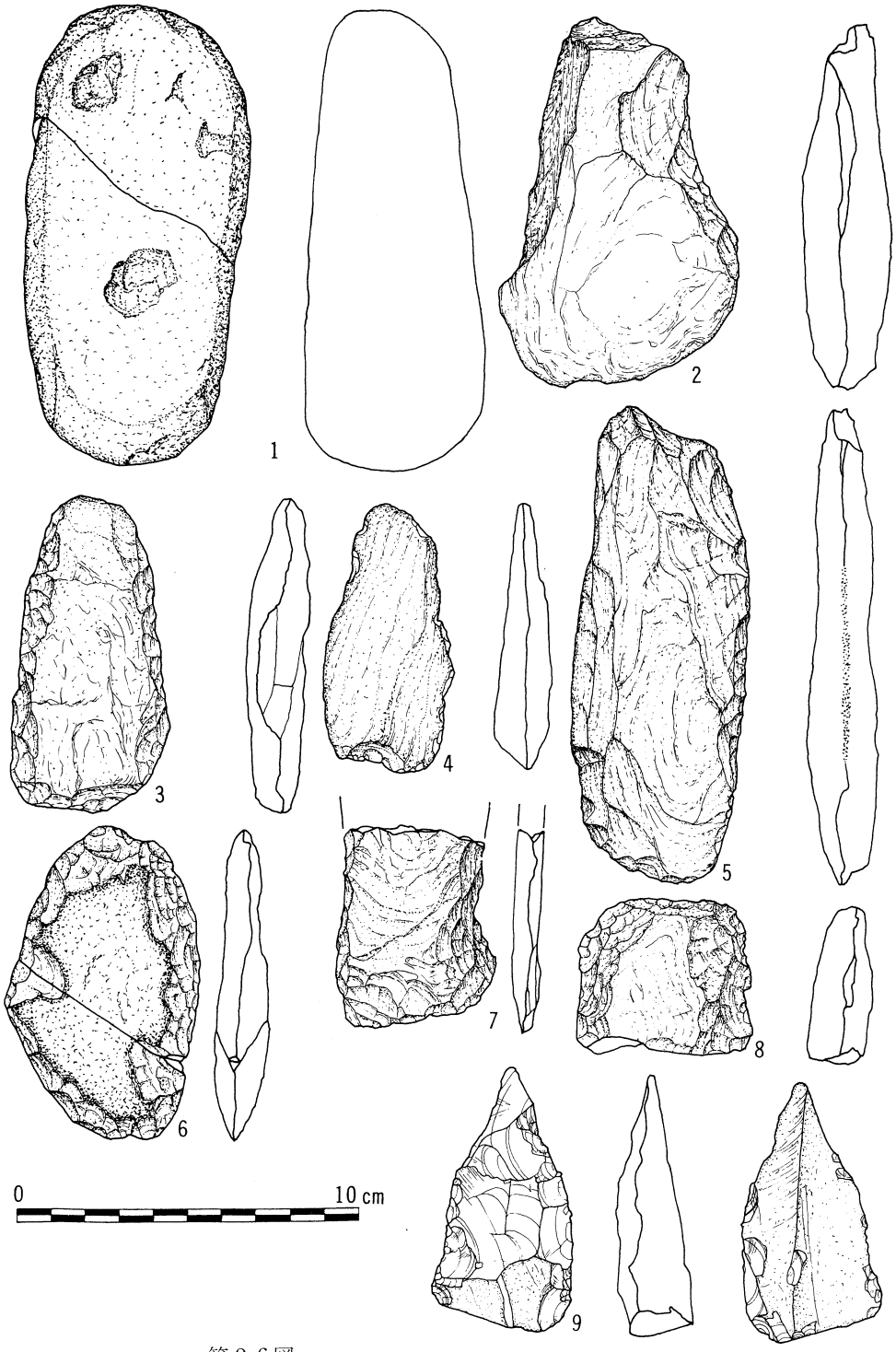
第２３図



第２４図



第２５図



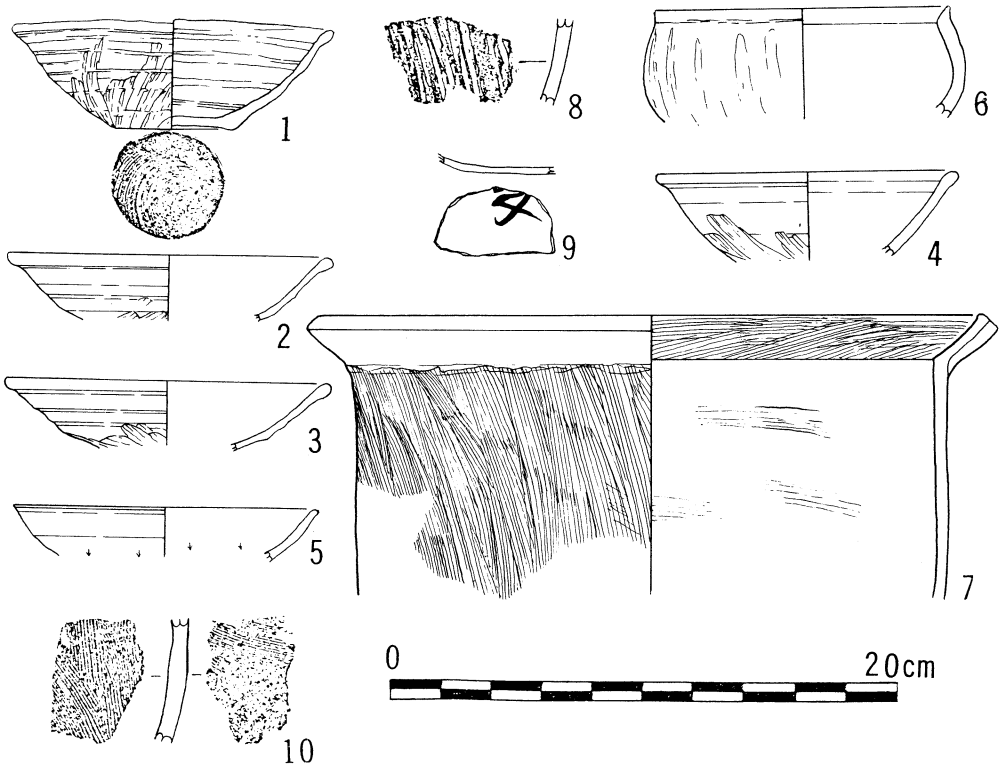
第２６図

歴史時代出土遺物（第27図）

遺跡内１Ｂ、Ｃ、２Ｃ、３Ｃ各グリッドから出土しており、平安時代後半に属するものが主である。これらは筆者編年で示した北巨摩Ⅴ期(1)にあたり、菊島の盆地東部編年(2)では晩期Ⅱ—５式に比定されるものである。

１は完形品で、１Ｃ東グリッドのセクションベルトを徹去中に表土下２０㎝の所から発見されたもので、口縁を上にして、やや斜の状態で出土した。口唇部は玉縁で外反し、粘土塊ロクロ法による水びきの跡が器内外面にあって凹凸状態を示し、外面胴部から底部にかけてヘラ削が右上から左下へ斜に軽く行なわれる。底部は糸切り離しの後、手持ヘラ削で周囲を二回程整形している。恐らく糸切りによって歪んだ底部を修正しているものと思われる。胎土は赤色の酸色の酸化鉄粒子が混入するきめこまかなもので全体としては赤褐色を呈する。

２、３号はいづれも同時期の所産で、２は１Ｂ、３は１Ｃのグリッドから出土した破片である。



第２７図

口縁は玉縁で外反し、内側は滑らかなロクロ横ナデ、 外面は水びき痕が明瞭で、胴部下から底部にかけてヘラ削が施される。 器形は皿形と思われ赤褐色で粒子こまかく焼成も良い。 4は前記3例と比べると器肉がやや厚く、黄褐色を呈するもので、 内面横ナデ整形、外面はロクロ横ナデ複雑なヘラ削りが施される。 2Cグリッドからの出土遺物である。 5は灰釉陶器で、 3C東側からの出土、口径12㎝と推定される破片で、 灰緑色釉は全面に施され胎土は灰白色の密なものである。恐らく折戸53号窯期に比定されるものであろう。 6は土師器皿底部で墨書の一部が見られるが完読されない。底部はヘラ削され赤褐色を呈する。 7は、1Cグリッドにかかる土壙内出土の甕であって、やや浮いた状態で出土している。 内面は横、外面はたて方向の刷毛目が施され、胎土には雲母が多く混入する暗褐色の土器で焼成は良い。時期は北巨摩Ⅵ期、 盆地晩期Ⅱ—4～5期に比定されるものであろう。 10も甕胴部破片で1Cグリッドの土壙内より出土したものである。 雲母を多く含み赤褐色を呈して、焼成も良好である。

6、8は平安時代以前の遺物と考えられるもので、 8は条痕文が施された破片で、6は丸底坩であって赤褐色を呈し、外面はヘラで良好に磨かれている。

9は1～4と同時期の杯破片で、墨書が見られるが判読できない。

（註）

1　末木　健　1976「山梨県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書—須玉町地内」山梨県教育委員会

2　菊島美夫　1976「土師式土器晩期編年試案」甲斐考古12—2

挿図	No.	出土地	備考
7	1	3C東	覆土
	2	3C	〃
	3	4C西	〃
	4	2C東	〃
	5	2D東	〃
	6	2D東	〃
	7	3D西	〃
	8	2C東	〃
	9	2C東ベルト	〃
	10	3C東ベルト	〃
	11	2C東	〃
	12	3C東ベルト	〃
	13	3C西	〃
	14	4D東	〃
	15	2C東	〃
	16	2C東	〃
	17	3C西	〃
	18	4C西	〃
	19	2C東ベルト	〃
	20	2C東	〃

挿図	No.	出土地	備考
7	21	2C東	〃
	22	2D東	〃
	23	3D西	〃
	24	3C東ベルト	〃
	25	2C東	〃
	26	3C	〃
	27	3C西	〃
	28	3D西	〃
	29	4D西	P7
	30	3C	覆土
8	1	3C東	〃
	2	3D東	〃
	3	4D西	〃
	4	2C	〃
	5	2C東	P10
	6	2C東	
	7	2C	
	8	4D東	
	9	3C東ベルト	
	10	3D	1号住Pit7内

挿図	No.	出土地	備考
8	11	3、4D	
	12	2C東	
	13	3C	
	14	4D東	
	15	4C西	
	16	5、6C	
	17	3C西	
	18	2C東	
	19	2C東	
	20	4C東	
9	1	3C東	
	2	3C東	
	3	3、4D	
	4	5、6C	
	5	4D東	
	6	3、4D	
	7	2C東	
	8	3トレ	
	9	2C東	
	10	2C東	

挿図	No.	出土地	備考
9	11	4D西	
	12	2D東	
	13	2C東	
	14	2C東	
	15	1B	
	16	3C西	
	17	3D西	P3
	18	4D西	
	19	4C東	
	20	4D西	
	21	2C東ベルト	
	22	2C東	
	23	2C東	
	24	2C東ベルト	
	25	3C東ベルト	
	26	2C東	
	27	3、4D	
	28	3C西トレ	
	29	2C東	
	30	2C東	

挿図	No.	出土地	備考	挿図	No.	出土地	備考
10	31	5.6C	覆土	11	2	3.4D	覆土
	32	3C東	〃		3	2C東	〃
	33	3.4D	〃		4	2C東	〃
	34	3C東	〃		5	3C西	〃
	35	3C	〃		6	2C東	〃
	36	3C	〃		7	2C東	〃
	37	3D西	〃		8	3C東	〃
	38	1B	〃		9	3C西	〃
	39	3.4D	〃		10	2C東	〃
	40	2C東	〃		11	3トレb	〃
	41	3C西	〃		12	3C東	〃
	42	3C東	〃		13	3トレb	〃
	43	3D西	〃		14	3C西	〃
	44	3D	〃		15	3.4D	〃
	45	3C西	〃		16	3C	〃
	46	3C	〃		17	3.4D	〃
	47	3C東	〃		18	2D東	〃
	48	2C東	P 4		19	3C西	〃
	49	2C東	覆土		20	2C東	〃
11	1	3C西	〃		21	2C東	〃

挿図	No.	出土地	備考	挿図	No.	出土地	備考
	22	3C	覆土	13	3	3C西	覆土
	23	2C東	〃		4	3C西	〃
	24	3C	〃		5	2C東	〃
12	1	3C西	P 4		6	3C西	〃
	2	3D西	覆土		7	2C東	〃
	3	2C東	〃		8	2C東	〃
	4	3C	〃		9	4D西	〃
	5	3.4D	〃		10	3C	〃
	6	2C東	〃		11	3C西	〃
	7	3D西	〃		12	2D東	〃
	8	2C東	〃		13	4D西	〃
	9	3C西	〃		14	1号住	Pit 1内
	10	4C西	〃		15	3C西	覆土
	11	2C東	〃		16	3C東	〃
	12	3C	〃		17	4D西	〃
	13	3C西	〃		18	3C西	〃
	14	2C東	〃		19	3C	〃
	15	3C西	P—2		20	4D西	〃
13	1	2C東	覆土		21	3C	〃
	2	3C西	〃		22	2C東	〃

挿図	No.	出土地	備考
13	23	2C東	覆土
	24	2C東	〃
	25	3C西	〃
	26	4C西	P—1
	27	3C西	覆土
14	1	3C	〃
	2	3C	〃
	3	3C西	〃
	4	3C	〃
	5	3D西	〃
	6	4D西	〃
	7	3C西	〃
	8	3C	〃
	9	3C	〃
	10	3C	〃
	11	3D西	〃
	12	3C西	〃
	13	2C東	〃
	14	3C西	〃
	15	3D西	〃

挿図	No.	出土地	備考
14	16	3C	覆土
	17	4D西	〃
	18	3C	〃
	19	3C西	〃
	20	3C東ベルト	〃
	21	3C西	〃
	22	4D西	〃
	23	3C東ベルト	〃
15	24	3C西	〃
	25	2C	〃
	26	2D東	〃
	27	3C西	〃
	28	3C	〃
	29	3C西	〃
	30	3C東	〃
	31	3C東	〃
	32	2C東	〃
	33	2D東	〃
	34	2C東	〃
	35	3C	〃

挿図	No.	出土地	備考
15	36	3C東	覆土
	37	3C	〃
16	1	4D西	
	2	3C東	
	3	3.4D	
	4	3C東	
	5	4D西	
	6	2D東	
	7	3D西	
	8	3C東	
	9	3.4D	
	10	3C西	
	11	3C東	
	12	3C	
	13	3D西	
	14	3C	
	15	1B	
	16	3.4D	
	17	3C東	
17	1	3C	

挿図	No.	出土地	備考
17	2	3C東	
	3	4D西	
	4	4D西	
	5	3C東	
	6	3C	
	7	2D東	
	8	3.4D	
	9	4D西	
	10	3.4D	
	11	2C東	
	12	3C東	
	13	3.4D	
	14	3C東	
	15	3.4D	
	16	4D	
	17	2C東	
	18	3C	
	19	3C東	
	20	3.4D	
	21	4D東	

挿図	No.	出土地	備考
17	22	3.4D	
18	1	3.4D	
	2	3C	
	3	3D西	
	4	3D西	
	5	2C東	
	6	2C東3C	P1—P2
	7	2C東	P—2
	8	2C東	
	9	2C東	P—3
	10	2C	P—1
	11	2C東	
	12	3C	
	13	2C東	P—2
19	1	3C東	P—2
	2	3C	
	3	4D西	
	4	4D東	
	5	3.4D	
	6	4D東	

挿図	No.	出土地	備考
19	7	3C東	
	8	3C東	
	9	3.4D	
	10	4D東	
	11	3C東	
	12	5.6C	
	13	4C西	P—1
	14	4D西	P—4
	15	3C東	
	16	3C東	
	17	3C	
	18	2C東	
	19	3C	
	20	4D西	
	21	3.4D	
	22	4C西	P—1
	23	5.6C	
	24	4D東	
	25	3.4D	
	26	3C東	

挿図	No.	出土地	備考
19	27	3C東	
	28	3C	
	29	2C東	
	30	4C西	P—1
	31	4C西	P—1
	32	3.4D	
20	1	3C東	P3
	2	3D東	P1
	3	3C	
	4	3C	
	5	3.4D	
	6	3.4D	
	7	3D西	P—2
	8	3C東	
	9	4D西	P3
	10	3.4D	
	11	3C	
	12	表採	
	13	4D西	
	14	3C東	

挿図	No.	出土地	備考
20	15	3D西	
	16	3.4D	
	17	3.4D	
	18	3C	
	19	3.4D	
	20	3.4D	
	21	3.4D	
	22	4D	
	23	4D西	
	24	3C東	
	25	3.4D	
	26	3C東	
	27	1B	
	28	4D西	P 6
	29	4D東	
	30	4D東	
21	1	3.4D	
	2	3C東	
	3	3C東	
	4	3C	

挿図	No.	出土地	備考
21	5	1C	
	6	4D西	P8
	7	3C	
	8	1B	
	9	4D東	
	10	4D東	
	11	1C	
	12	4D東	
	13	3C東	
	14	4D東	
	15	4D東	P2
	16	3.4D	
	17	4D東	P2′
	18	4C東	
	19	4C西	P1
	20	3C西	P7
	21	4D西	P8
	22	3.4D	
	23	3.4D	
	24	1C	

挿図	No.	出土地	備考
21	25	3.4D	
	26	4D西	
	27	3C	
	28	3D東	
	29	3.4D	
	30	5.6C	
	31	3C東	
	32	3C東	
	33	3.4D	
	34	3C東	
22	1	3C東	
	2	3C東	
	3	8B	
	4	3.4D	
	5	4D東	
	6	3.4D	
	7	3.4D	
	8	3.4D	
	9	4D西	
	10	4D西	P5

挿図	No.	出土地	備考
22	11	3.4D	
	12	2C	
	13	7D	
23	1	1号住居	埋甕炉1
24	1	3C西	P1
	2	1号住居	埋甕炉2
	3	2C	P3
	4	2号住居	埋甕外
	5	2号住居	埋甕
25	1	4D東	P—1
	2	3C西	P6
	3	3C西	P9
	4	3C東	黒曜石
	5	3.4D	
	6	2C東	S3
	7	3D東	
	8	3C西	S7
	9	4C西	S1
	10	3C西	S5
	11	2C東	S6

挿図	No.	出土地	備考
26	1	3D西	S1
	2	4D西	S2
	3	3C	
	4	4C	
	5	3C西	S4
	6	3C	
	7	4C東	
	8	3.4B	
	9	3C西	
27	1	1C東	
	2	1B土壙	
	3	1C土壙	
	4	2C	
	5	3C東	灰釉陶器
	6	4D	P9
	7	1C土壙	P1
	8	2C東	条痕文施文
	9	1B土壙	
	10	1C土壙	

3 ま と め

寺平遺跡をまとめるにあたって五領ケ台式に属する遺物がやはり問題とならざるを得ない。本県下に於てこの時期の住居址の発見は中道町下向山遺跡に次ぐもので、とかく不明な部分の多い所でもあり、その解明にはまだ数多くの資料と日数が費されるものと考えている。

そこで、この時期の遺物理解の為に若干の遺跡の資料を取り上げて紹介したい。勿論時間的な制約の為に遺物に直接触れられなかったものも多く、報告書から転載させていただいた資料も多い。又、代表的な資料を取り上げていないかもしれないが、それも御了解願いたい。

寺平遺跡と県下各遺跡出土遺物の差について若干触れ、五領ケ台式土器群のもつ問題の一部にでもせまることができればと考えている。

○上平出遺跡(1)　(第２８図)

北巨摩郡小淵沢町上平出所在遺跡で八ケ岳の山麓標高９５０ｍに位置する。昭和４７年度の中央道建設予定地のため発掘調査を行ない、縄文時代中期初頭の土壙群と、中期後半の住居址２軒、後期敷石住居１軒と土壙、平安時代住居７軒が発掘されている。

縄文中期初頭の住居址は発見されておらず土壙内に一括土器が出土している。これらはほとんど同時期に造られたものと考えられ、代表的な遺物を第２８図にあげた。１～４の共通点は口縁部の屈曲であり、口縁部に１～２条の隆帯をめぐらし、屈曲下半は縦の半載竹管の平行沈線でうめる。１、２５は無文胴部に特殊な懸垂文で４区画されるが、特に２、５の文様は人形文とも呼べる様な文様であり、八王子西野遺跡出土遺物中にも見られるものである。６、７は口唇部に列刻文が施され、６は平行沈線、７は結節状沈線文が横走する。五領ケ台として特徴的な鋸歯状文が施されるが、３は胴部にも巾広く施文され、中には底部に近い所に幾条が施されるものもある。

これらについてはすでに報告済のものもあるが概報の為、未報告のものも若干含んで今回図示した。

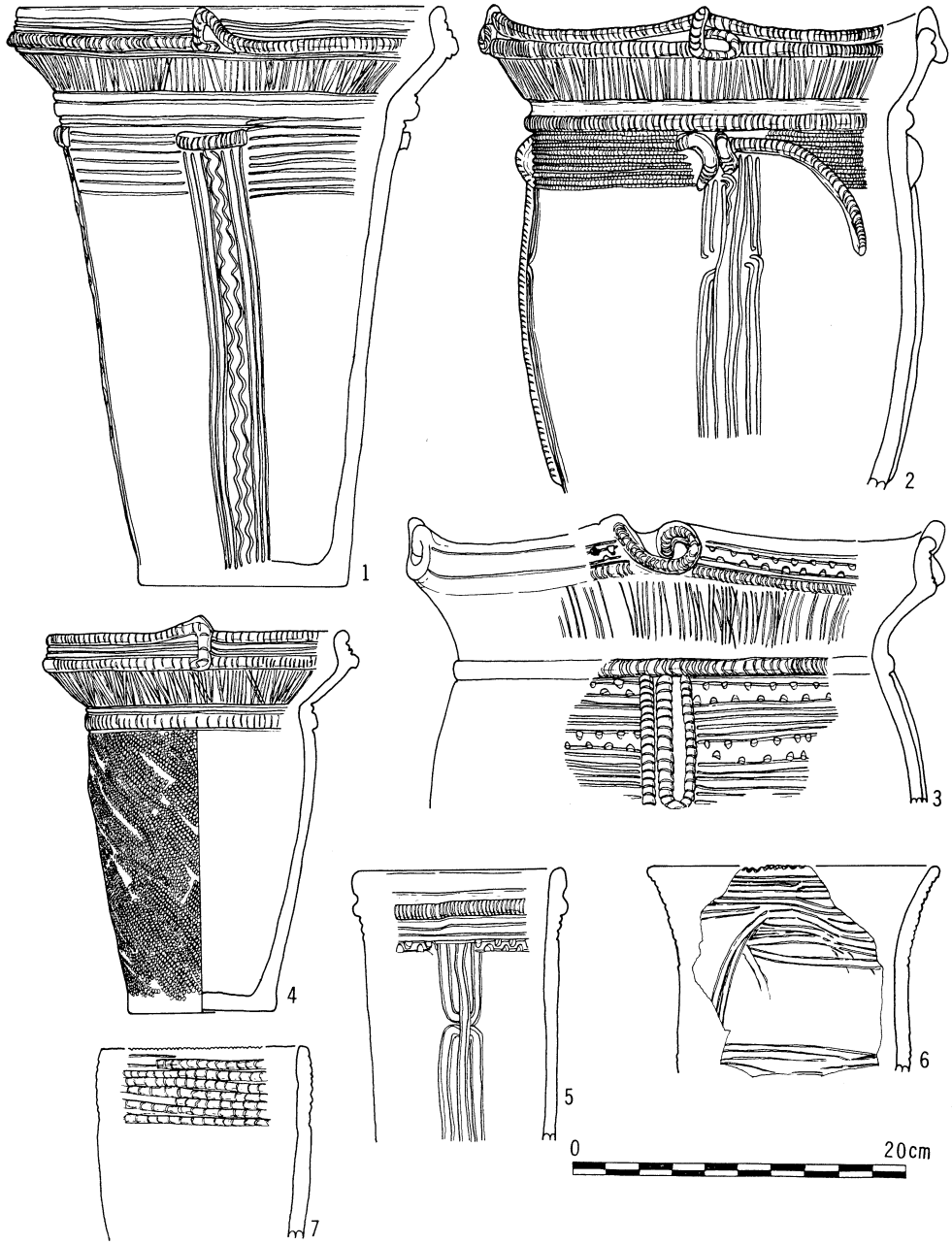
○宇波円井遺跡(2)(3)（第２９図）

韮崎市宇波円井所在遺跡で、縄文前期末から中期初頭の遺物が発見されている。昭和３８年に刊行された山梨県遺跡分布地図に６５９番として記載され、釜無川右岸標高４７０ｍに位置する。①、②は甲斐考古５―１に記載されたものを転載し、他は都留文科大学考古学研究会の昭和４３年研究発表要旨から転載したものである。

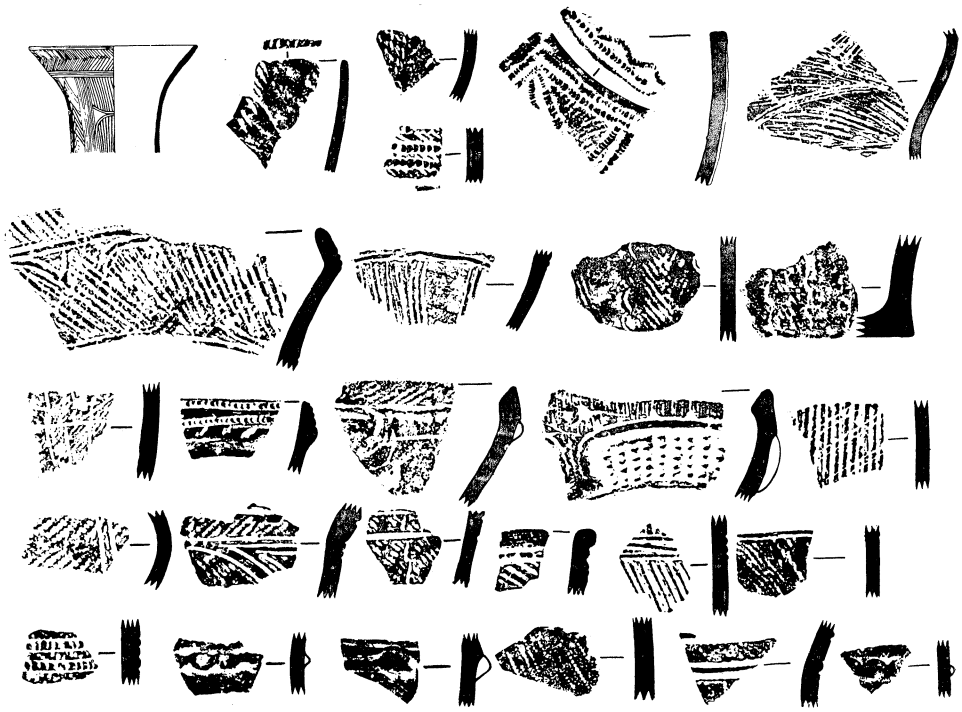
これらの遺物には踊場式と呼称されるものと、通称五領ケ台Ⅰ式とが多く含まれており、口縁部橋状把手等神奈川県宮の原貝塚の出土遺物との関連を想わせる。

○机腰遺跡（第３０図）

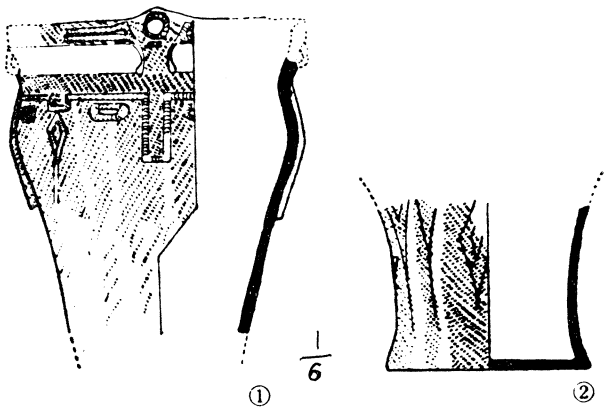
北巨摩郡明野村小笠原字机腰所在遺跡で、現地は不明であるが、明野村公民館に所蔵されている資料である。口縁部に２ケ所の波状把手をもち、一周帯状のＲＬの縄文帯をめぐらし、胴部はＬＲの縄



第２８図　小淵沢町上平出遺跡出土遺物

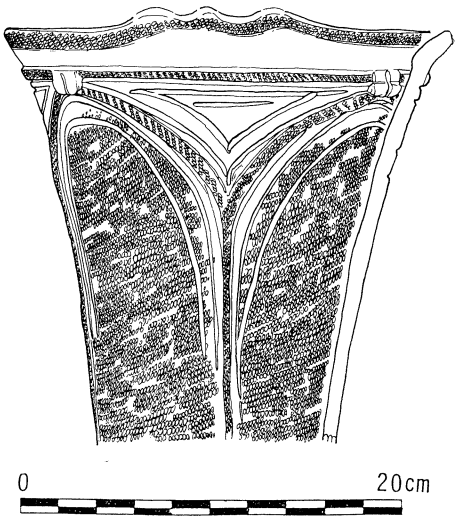


縮尺は，実測図$\frac{1}{12}$，　択本$\frac{1}{4}$である。



第２９図　韮崎市宇波円井遺跡出土遺物

文地文が施され、粘土紐を逆U字に貼り付けて連続させ、頸部の横の粘土紐との連結部にはボタン状の貼付けがなされる。粘土紐の側に棒状の工具で沈線を1～2本並べている。赤褐色で雲母を含み焼成は良好であるが、底部を欠損する。胴部区画は4、把手は前が波頂部3、後が2である。五領ケ台式の新らしい部分に属するであろう。



第30図　明野村机腰出土

○宮の裏遺跡(4)（第31図）

東八代郡御坂町八千蔵字宮の裏遺跡は縄文時代前期末～弥生～土師器（五領～国分）の各時代の遺物が採集されるが発掘調査はなされていない。この縄文前～中期初頭の遺物は近く甲斐路30号に紹介する予定であるが、所謂踊場式、梨久保式の古い部分と、藤内式との間の遺物が少なく五領ケ台Ⅱ式に比定されるのは1片である。ある意味では各々の遺跡の断絶と型式の転換の関連を追求しておかなければならないであろう。

○下向山遺跡(5)

東八代郡中道町下向山所在のこの遺跡は吉田格氏によって昭和37年に調査され、竪穴住居址と一括遺物が出土している。その他に茅山式、弥生式土器片及び滑石製玦状耳飾等が表採されており、五領ケ台式土器は5類に分けられる。第1類は無文土器、第2類は皿形土器で内面の口辺部に連続爪形文がつけられたもの、第3類は半載竹管、平行沈線及び爪形文が施されるもの、第4類は縄文を主体とするもの、第5類を底部にそれぞれあてている。屈折口縁のものが少ない点は新らしい要素でありながら、寺平遺跡ほどに新らしくはないことが言える様である。

又、中道町右左口字東原の中期初頭～新道式に属する遺跡とその資料を山本寿々雄氏が発表している。(6)

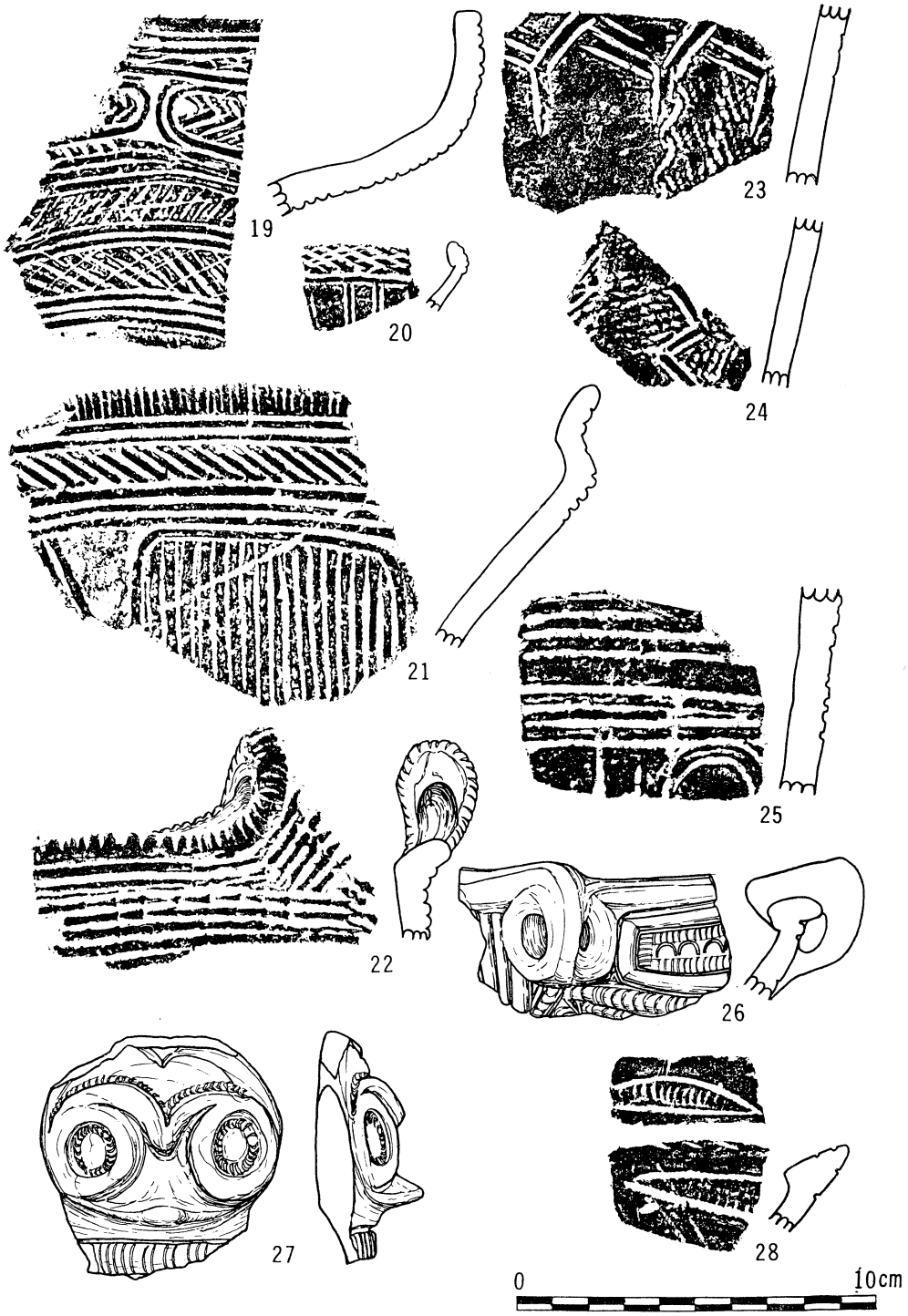
○辻遺跡(7)

東八代郡境川村藤垈字辻所在の曾根丘陸上の遺跡で標高380mに位置する。縄文時代前期末の十三菩提式～曾利式にかかる遺物があり、大規模農道建設に先立って調査が行なわれている。報告書中第一群が十三菩提式、第二群が前期終末から中期初頭のものを含んでいるが、遺構は不明である

○宮谷遺跡(8)（第32図）

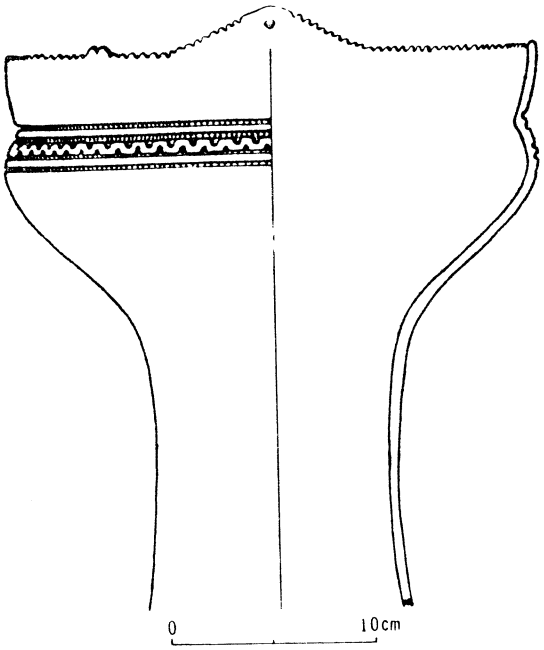
大月市富浜町宮谷字白山所在遺跡は国鉄中央線の鳥沢駅と猿橋駅の中間北側百蔵山麓標高400mに位置し、滝の沢右岸に沿う。

図示した資料は報告書より転載したものであるが、その概要は「底部を欠損した深鉢形土器で、部



第３１図　宮の裏遺跡

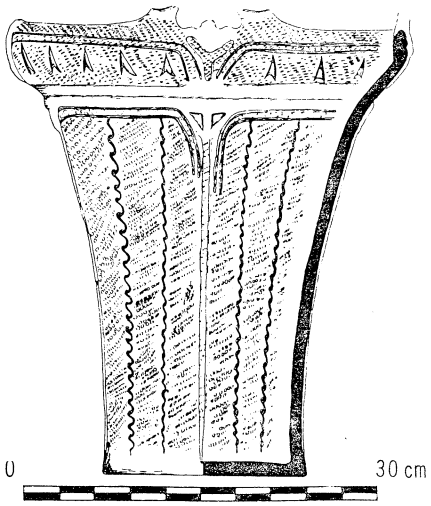
分的には赤褐色をしているが、全体的には黒褐色をしている。器面上部はよく研磨され、光沢をもっているが、胴部下半はザラザラしている。器肉はきわめて薄い。口縁には、小穴のある一個の山形把手と、二個の小突起を配し、刻をつけている。文様帯は頸部に限られ、竹管状工具による爪形文帯と、波状文帯とが周らされ、構成されている。波状部は三角形に近い掘り込みによって意匠されている。」と説明されている。出土状態は土壙内の伏甕と言われ、所蔵は石井徳重氏である。



第３２図　大月市宮谷遺跡

○田野倉遺跡(9)（第３３図）

都留市田野倉出土で出土状況等を知らないが、明野村机腰の土器と文様、器形上共通点が多い。報告より転載したのでやや不鮮明であるので、甲斐考古１２—１を参照されたい。



第３３図　都留市田野倉出土

この他に数多くの遺跡が近年市町村誌等で報告されているが、とりあえず管見に触れたものを取り上げた。最近塩山市の安道寺遺跡や町田遺跡で発見されたと聞くが、詳細は不明である。又、かって山本寿々雄氏が本県の中期初頭を概観したものがあり(10)、それも参考にさせていただいた。

今回取り上げた資料中、宮の裏遺跡、宇波円井遺跡等が前期末から続くもので、田野倉遺跡、机腰遺跡の土器は文様系統上近親性をもつものであるが、下向山遺跡遺物中の縄文地文のものと差がある。その差は頸部の連続刺突文帯であるが、分布や時期差なのか理解し得ない。机腰の様な土器の三角区画文帯が新道式の三角区画文に発達するのであろうか。あるいは下向山遺跡第四類中の三角区画内に玉抱文をもつ文様がそのまま新道式へと発展するのかも問われており、机腰の三角区画は平尾第９地点(11)中の土器にも見られ、佐藤達夫氏は五領ケ台式直後としている。寺平遺跡遺物中（第１１図）にも若干のそうした傾向も見られるが、寺平遺跡の方がやや古いのかもしれない。

五領ケ台式は一般的に中期初頭に位置づけられているが、前期末十三菩提式を含めて、そのバラエ

ティーの豊富さと、 遺構、遺跡自体の貧弱さに負けて、今までの学問大系の中に於て必しも充分とは言えない編年上、型式上の位置しか与えられていない。

しかし、それは今回の住居の発見によっても同様のことが言える訳で、 今発掘によって得られた資料の大部分が関東で言う五領ケ台Ⅱ式と加曽利E式に属し、 これらを中部地方では唐沢（九兵衛尾根Ⅱ式）及び曽利Ⅱ式としている。

かって本県東八代郡中道町下向山遺跡より吉田格氏が発掘した五領ケ台期の住居出土遺物に時期的には近似しながらも、異なる点がいくつか見られる。 まず下向山遺跡に含まれる、第3類の内面口縁部に帯状の半載竹管の爪形文がある浅鉢の一群が全く見られず、 新道式の前段階とも言える玉拘三叉文を中にもつ三角区画横帯文等がある土器も見られない。 むしろ八王子西野遺跡A—2類⑿とされた土器群に近似し、 かって筆者らが調査した小淵沢町上平出遺跡土壙群出土の土器とほぼ同期かやや新しい時期のものと考えられる。 下向山遺跡と時期的にやや異なるもので、若干系統も異なるものとして考えられるのかもしれない。 又、宮の原9群が関東的なものとしてあり、下向山等のものと同時期に属するとしているが、 これらは西八王子等も含め、中部高地、あるいは山梨、西東京等に中心をもつ一群として、西野A—1、2類を把えた方が良いかもしれない。

八王子西野遺跡深鉢形土器A—1類の口縁部がくの字に2段に屈曲している形状の初源は、 およそ前期後半の内彎した口縁をもつ深鉢形土器に見られると考えられるが、 中部の踊場式に屈曲が強くなることから、 より前期末に近いものと言える訳で、A—2類が中部での唐沢式と近似している点からもうかがえる。 山梨県下向山遺跡出土遺物も唐沢式と近い関係にあるものと思ってもよいであろう。

宮の原貝塚⒀で五領ケ台Ⅰとされた土器は長野では梨久保式として把えられ、 五領ケ台Ⅱは唐沢、神殿式として位置付けられているが、八ケ岳西南麓の武藤氏は、 籠畑遺跡の報文中で⒁籠畑Ⅱ→梨久保→九兵衛尾根の編年序列を示し、 かつて踊場式とされたものを籠畑Ⅰ～Ⅱ式の中に含め、関東の十三菩提式と対比されているが、その編年に諸問題もあり、 松村恵司氏の「縄文時代中期初頭土器研究」 ⒂に詳しいため言及しない。

しかし本遺跡第三群B類とした土器は全般的な遺物の量的状況からも五領ケ台に含まれるものかもしれないが、宮の原貝塚では5群a類とされ五領ケ台に先行する可能性が言われ、 又港北ニュータウン東方第7遺跡⒃では2号住居址覆土遺物の状態から五領ケ台と同期と考えている等見解が定まらない。 いずれにしろ従来踊場とされてきたものは五領ケ台より先行するか平行するかであって、ある意味では平出3類a等にも影響を与える様な息の長い土器なのかもしれない。

以上雑然と寺平遺跡出土遺物と周辺の遺物について述べて来たが、 今日の手持ちの資料ではあまりに問題点が多く、 又整理作業を緩慢に進めた為に多くの疑問点を残してしまった。後日機会を得て本遺跡の資料を生かしてゆきたいと考えている。

（註）

⑴ 末木　健他「山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」小淵沢地内　山梨県教育委員会

⑵ 石黒良行　1968「山梨県韮崎市円野町宇波円井遺跡発掘調査要旨」都留文科大学考古学研究会昭和43年研究発表要旨

(3) 都留文科大学考古学研究会　１９６８「北巨摩地方発見の縄文式時代中期初頭の土器」甲斐考古５の１
(4) 末　木　　健　１９７７「東八代郡御坂町八千蔵字宮の裏遺跡出土の縄文土器」甲斐路３０号
(5) 吉　田　　格　１９６３「山梨県東八代郡下向山遺跡」考古学雑誌４８の３
(6) 山　本　寿々雄　１９５９「山梨県東八代郡中道町東原の中期初頭の縄文式土器―その後判明するもの」富士国立公園博物館研究報告２
(7) 小　野　正　文 他　１９７０「辻遺跡と薊在家遺跡」山梨県教育委員会
(8) 川　崎　義　雄 他　１９７３「宮谷遺跡発掘調査報告」大月市教育委員会
(9) 山　本　正　則　１９７５「都留市田野倉出土の縄文式土器」甲斐考古１２―１
(10) 山　本　寿々雄　１９６８「山梨県下における中期縄文土器の編年資料」甲斐考古５の１
(11) 安孫子　昭　二 他　１９７１「平尾遺跡発掘調査報告書」平尾遺跡調査会
(12) 横　山　悦　枝　１９７４「八王子西野遺跡」東京西線及び北八王子変電所遺跡調査会
(13) 今　村　啓　爾　１９７２「宮の原貝塚」武蔵野美術大学考古学研究会
(14) 武　藤　雄　六　１９６８「長野県富士見町籠畑遺跡の調査」考古学集刊４―１
(15) 松　村　恵　司　１９７４「縄文時代中期初頭土器研究史」史館３号
(16) 牛　嶋　　茂 他　１９７４「港北ニュータウン発掘調査報告Ⅳ」

結　語

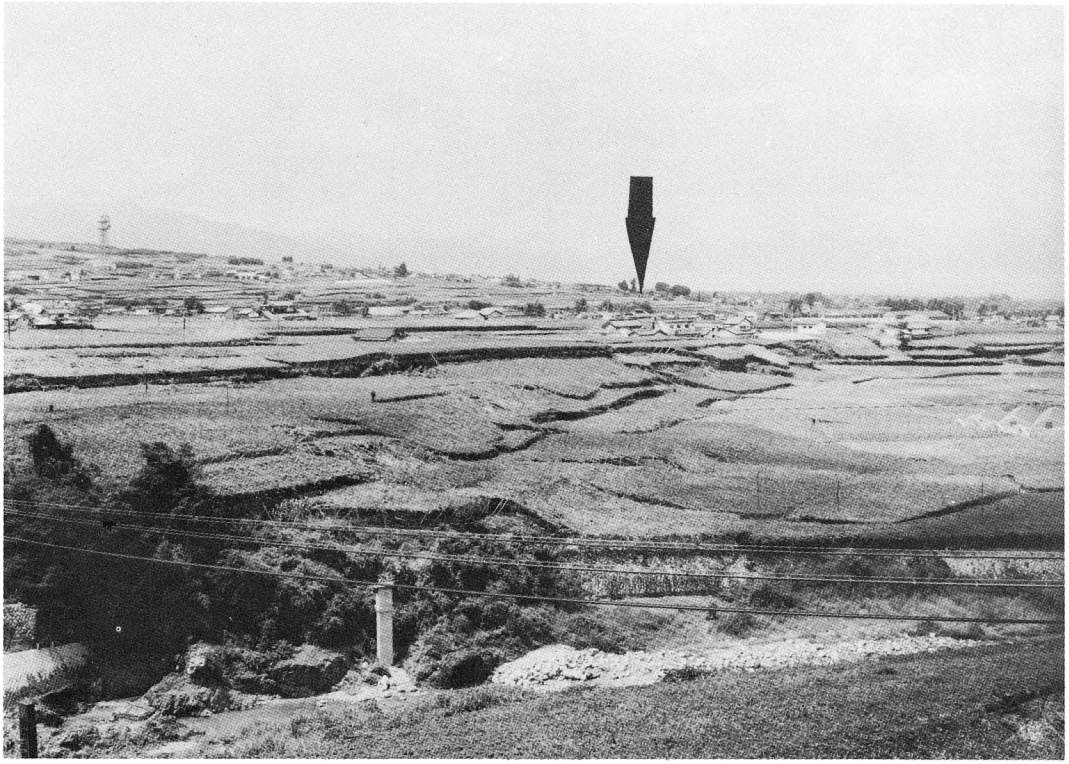
本県の考古学が活発化して来たのは開発行為による行政発掘調査の増加によってであり、それまでは一握の研究者の熱意に支えられて県下の状況が全国に知らされていたにすぎない。それは盆地の為に開発が遅れていたことや、経済先行の政治傾向も手助けをして、こうした方面が発展しなかったのであろうし、今後も充分すぎる程にはならないであろう。

しかし、こうした中で昭和５０年の法改正によって埋蔵文化財の保護が強化され、開発関係の各公団を始め、建設省、農林省との覚書等の交換により、文化財保護と開発の調和が目指されている。

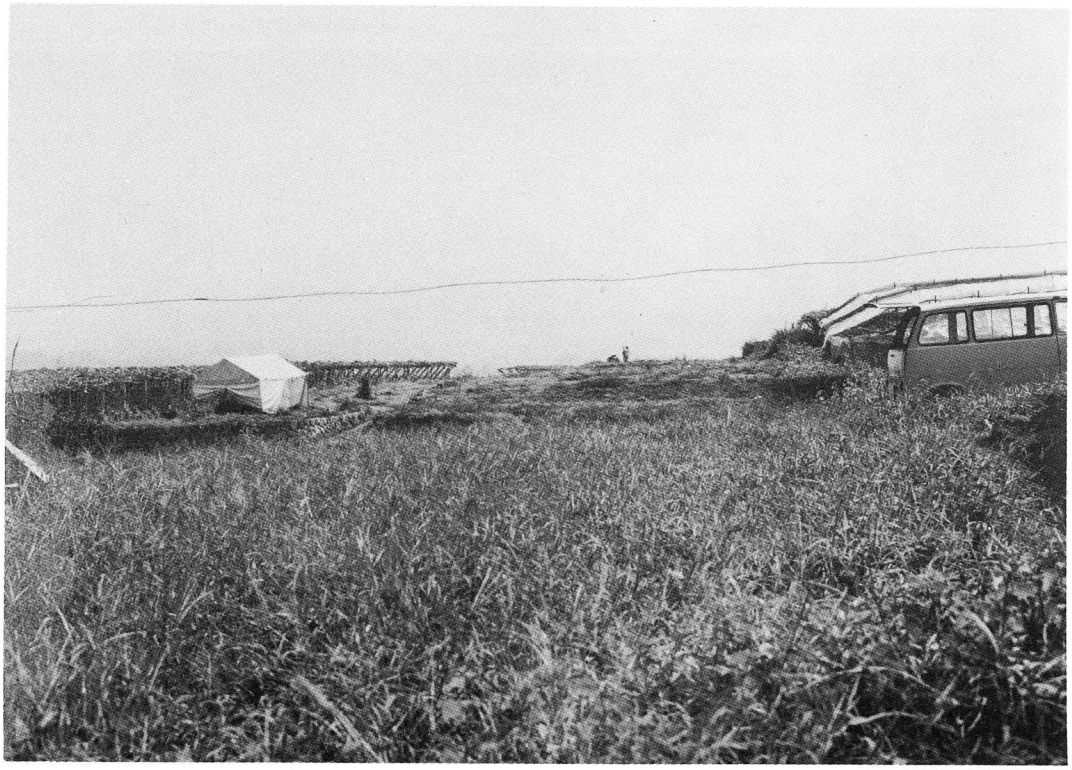
この勝沼バイパスにかかる地域は石和、一宮、勝沼の三町であるが、特に一宮町は甲斐国分寺、国分尼寺があり、奈良平安時代の甲斐国の文化、政治経済の中心地であった為、連綿と遺跡が並んでいた。それらの調査についてはすでに「下成田（Ｓ４７)」「甲斐国埋没条里構等の調査（Ｓ４８)」「古代甲斐国の考古学調査（Ｓ４９）」「同（続編）（Ｓ５０）」「方形周溝墓等の調査（Ｓ５１）」等として県教育委員会から出版され、関係各方面に配布されているがそのほとんどが前記した様に奈良～平安時代に含まれる遺構、遺物で他の時代のものは極て少量であった。今回調査した寺平遺跡は縄文時代のもので、しかも縄文時代中期初めの五領ケ台式と言われる発見例の少ない住居跡を調査し得たことは幸であった。

遺跡とは本来そのまま保存されることが望ましく、より科学的な調査方法が高まった段階で精密な記録を残しながら発掘すべきであるが、諸条件の制約の為に充分な記録を報告することができなかった。それはすべての調査担当の末木の責に帰すことであり、今後の反省材料として生かしたいと考えている。

また調査に関係された皆様の熱心な御協力を感謝しております。



1.　遺跡遠景（勝沼町字御所より）



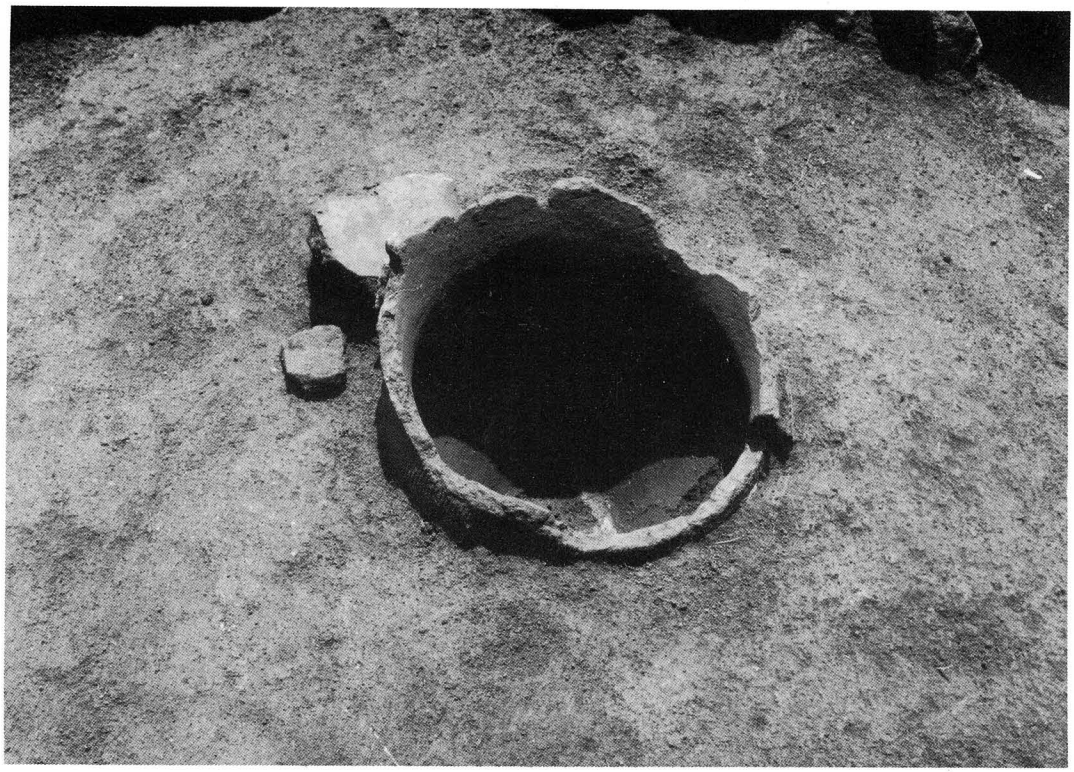
2.　同　　近　　景

3. 1 号 住 居

4. 1. 2. 号 住 居

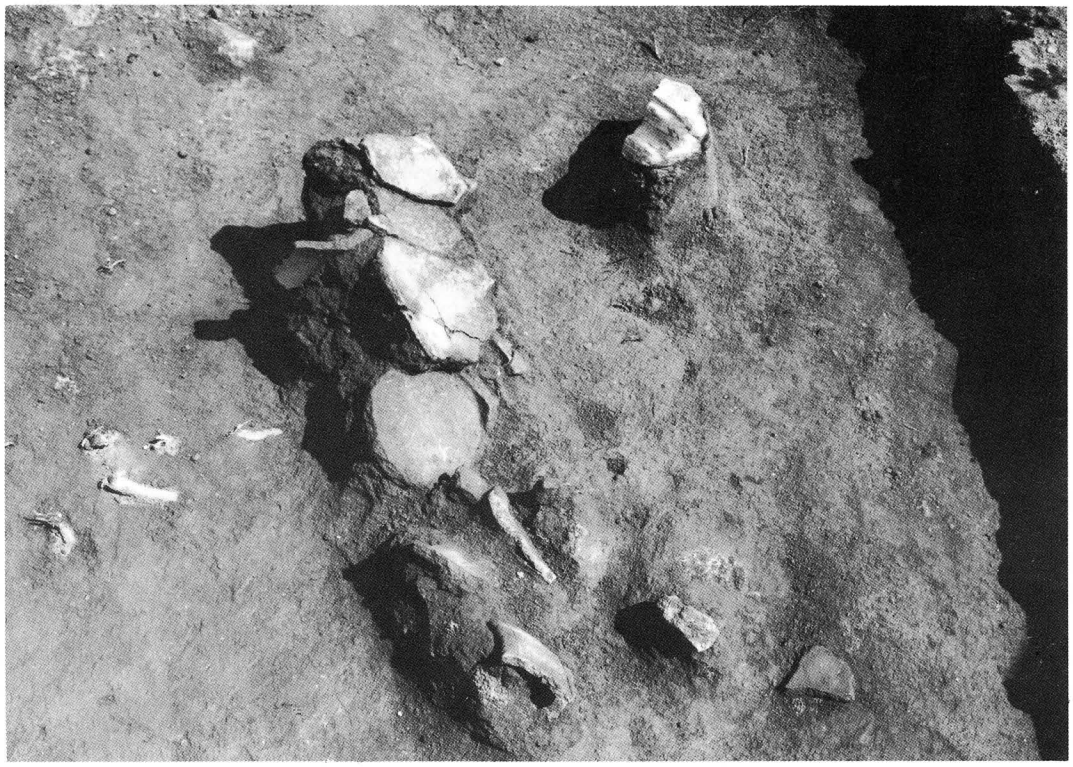
5.　1号住居埋甕炉1

6.　1号住居埋甕炉2



7.　2号住居埋甕

8.　同　　上

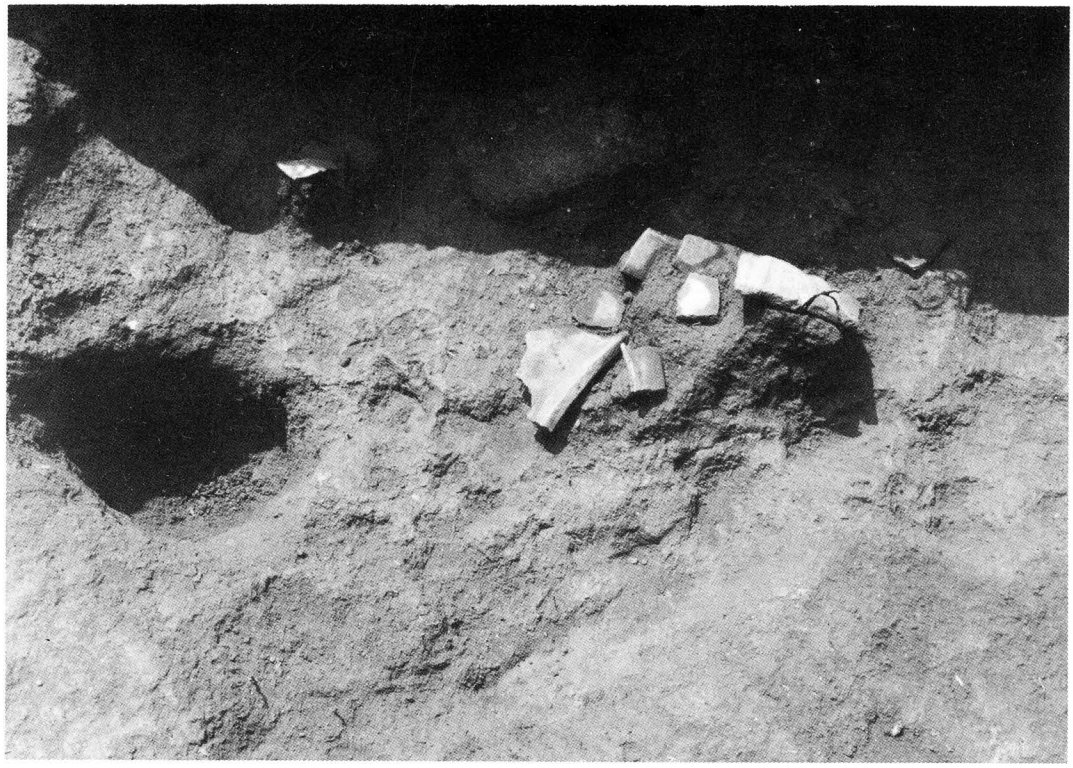


9.　1号住居遺物出土状態

10.　同　　上

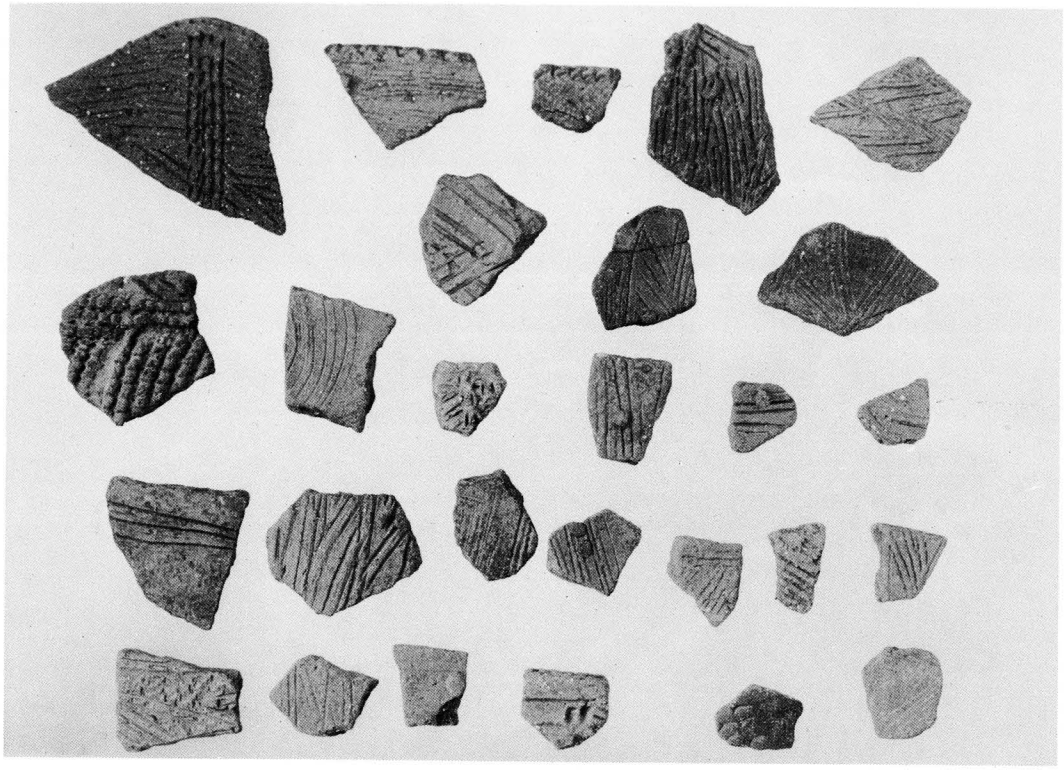
11.　土製円板、玦状耳飾出土状態

12.　土師器出土状態

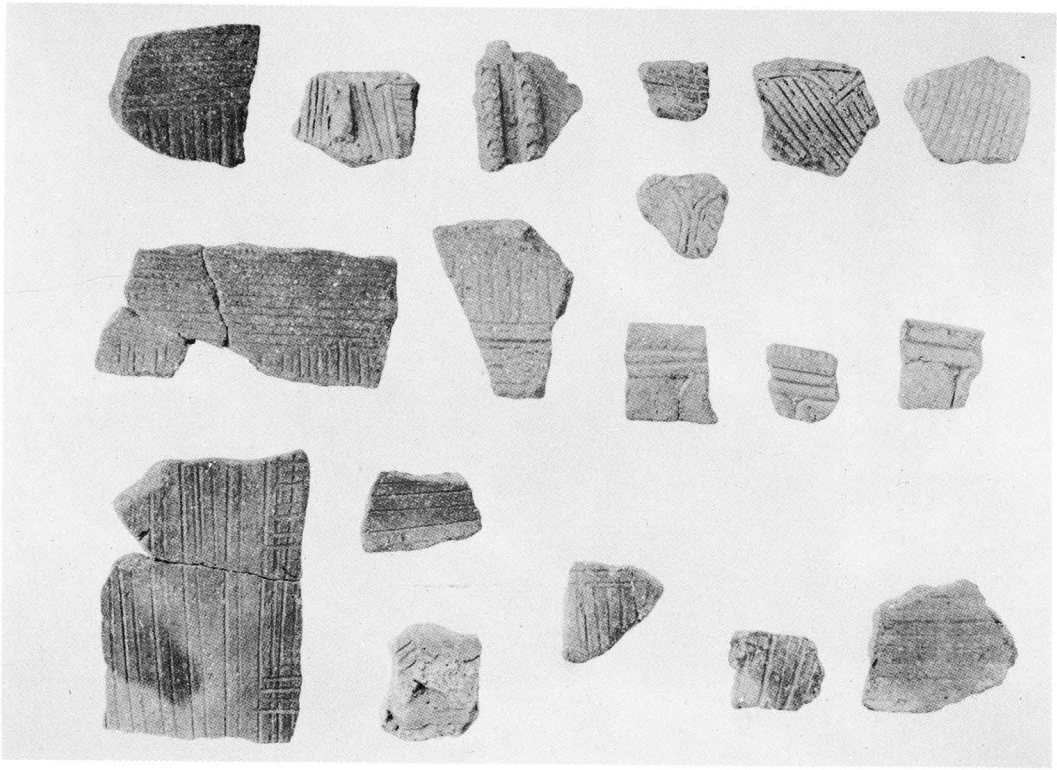


13.　土坑遺物出土状態

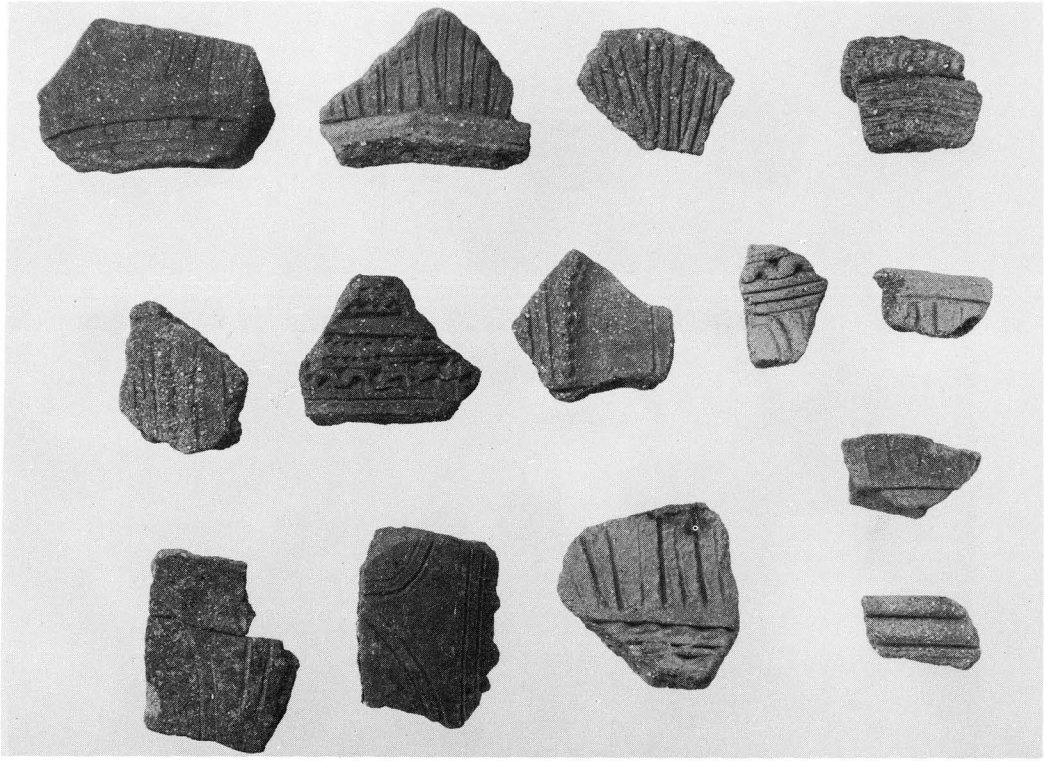
14.　発掘調査風景



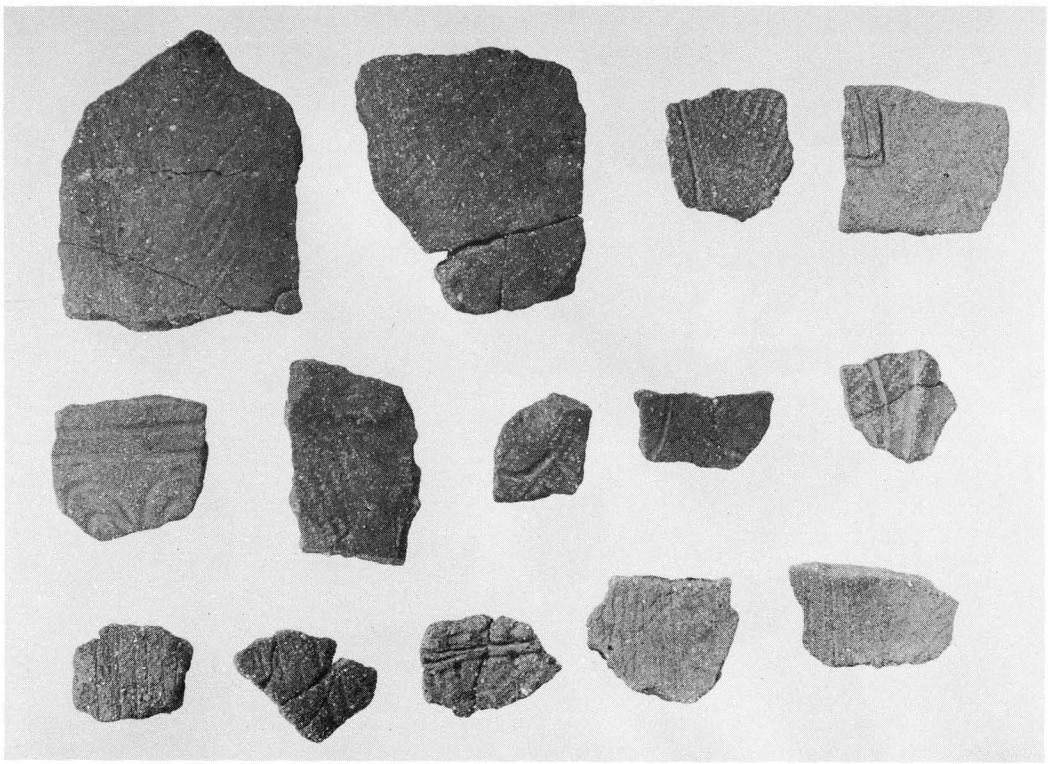
15.　縄文時代前期土器



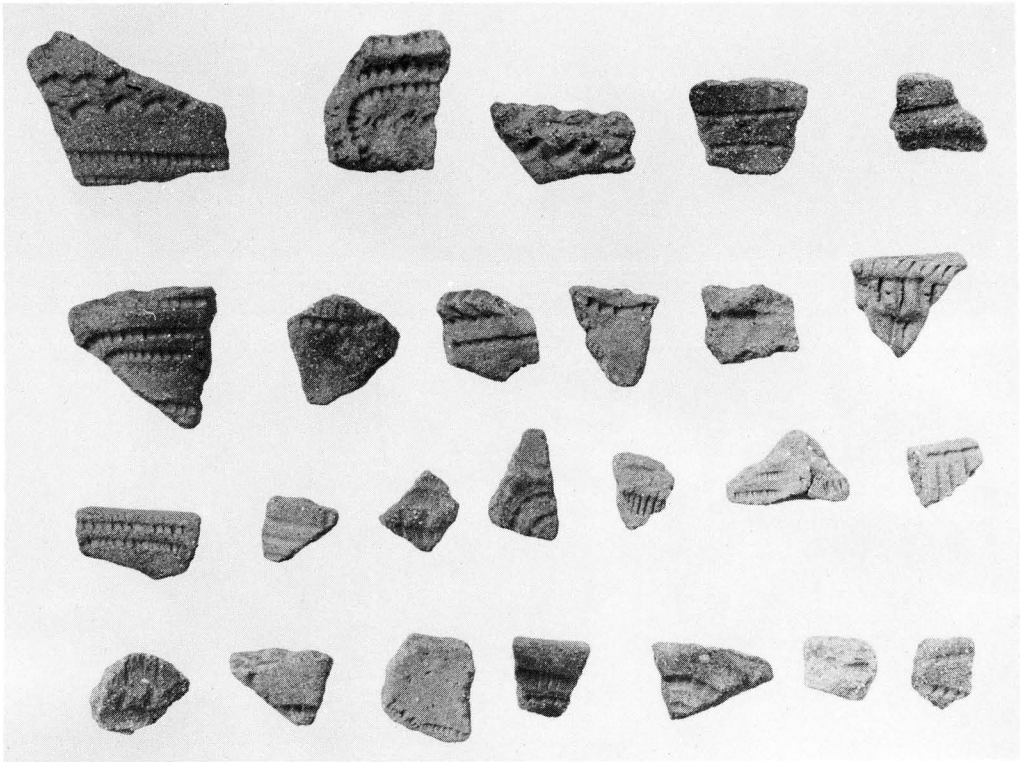
16.　縄　文　土　器



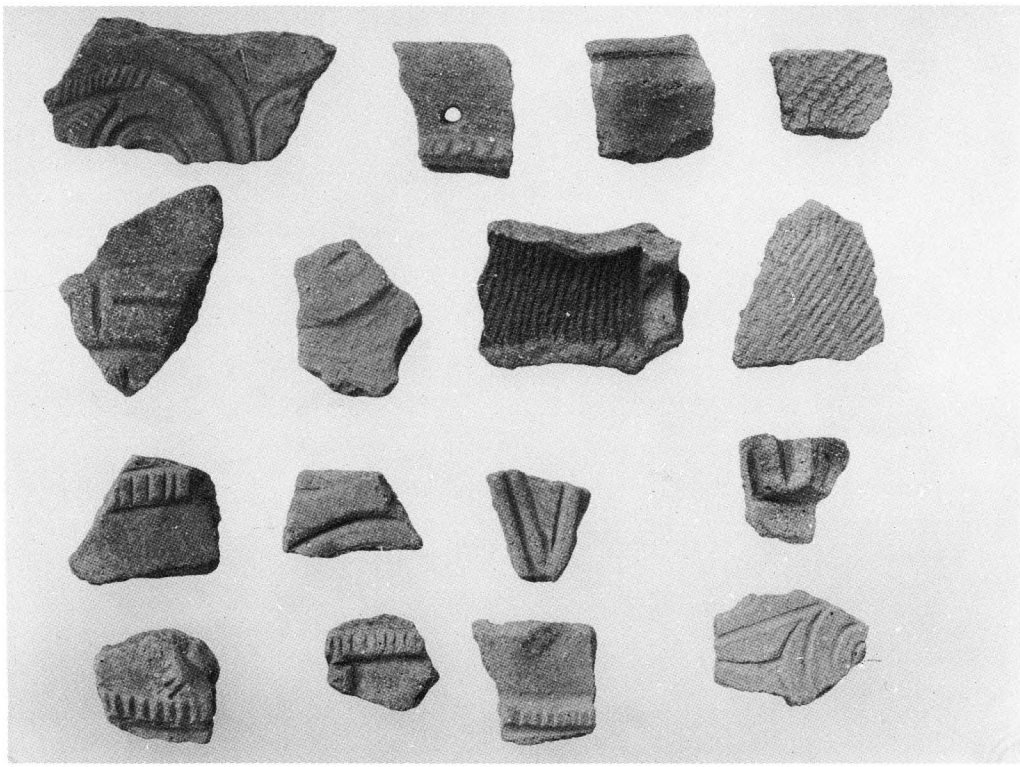
17.　縄文時代中期土器



18.　縄文時代中期土器

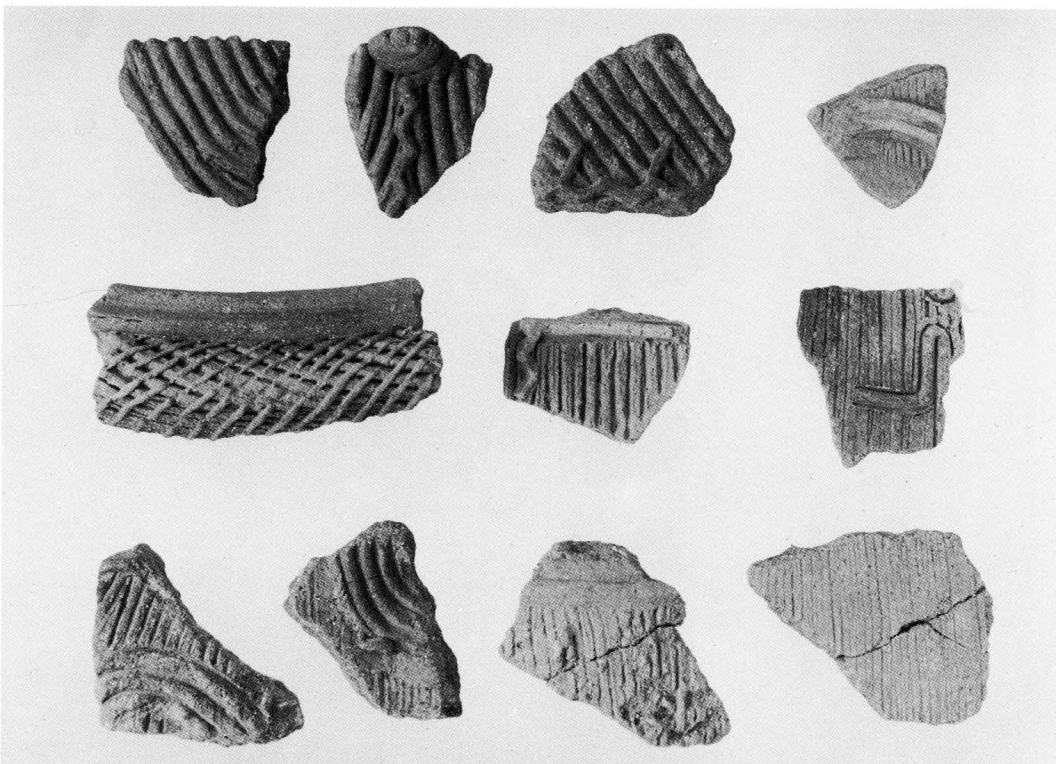


19.　縄文時代中期土器

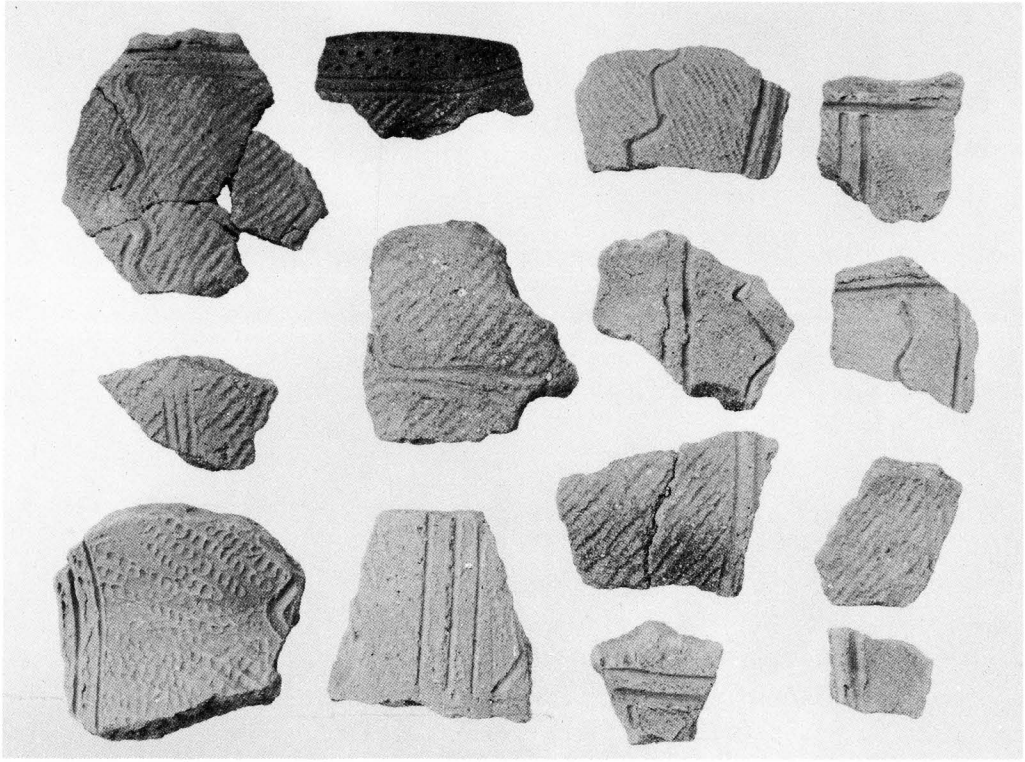


20.　縄文時代中期土器

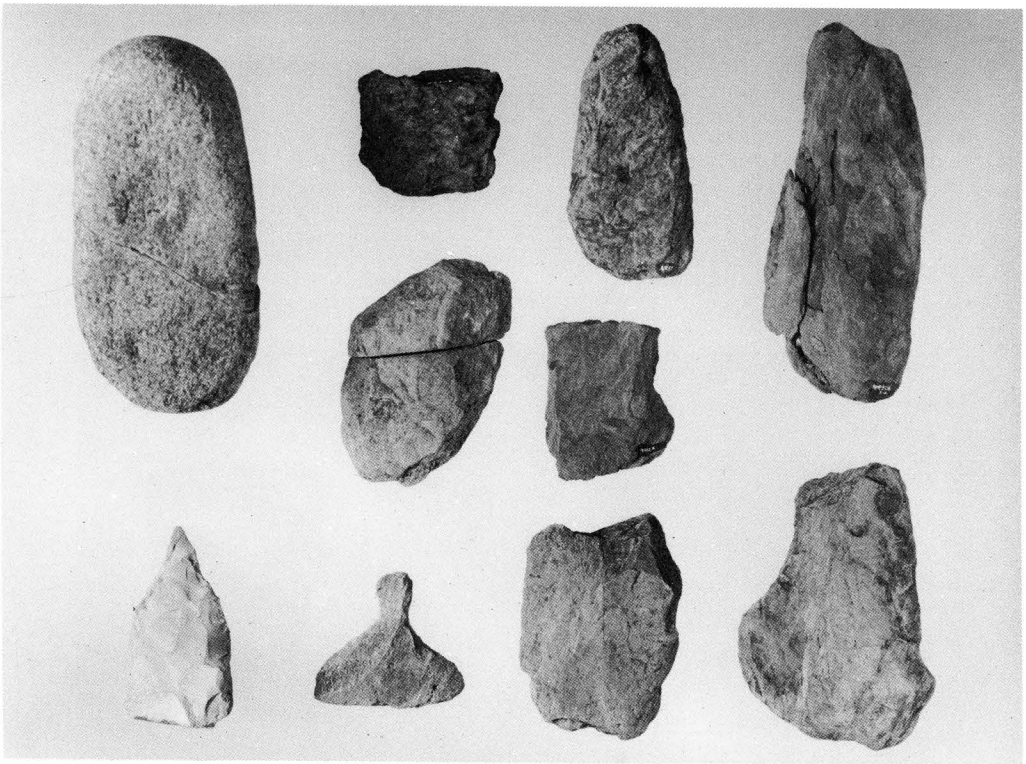
21.　縄文時代中期土器



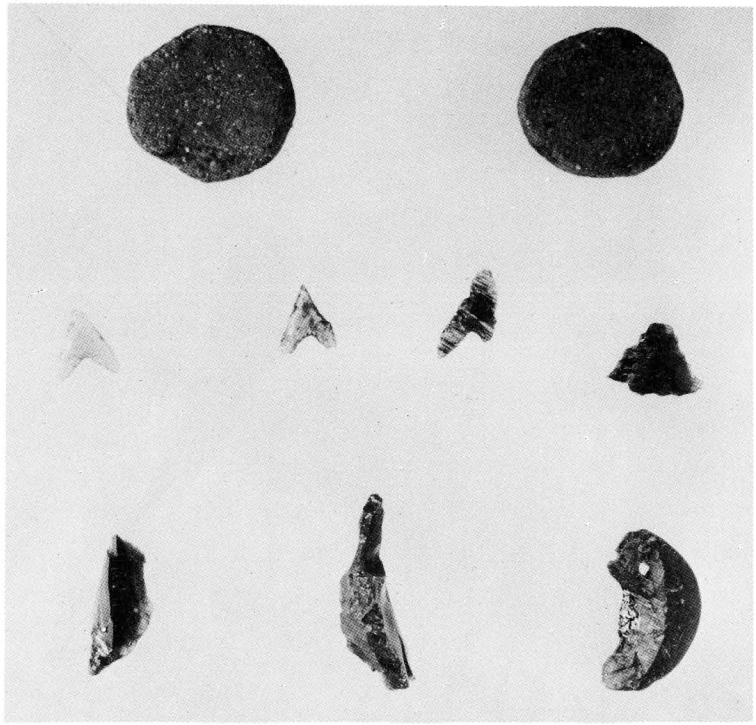
22.　縄文時代中期土器



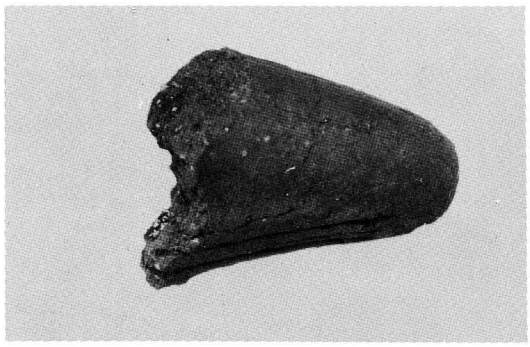
23.　縄文時代中期土器



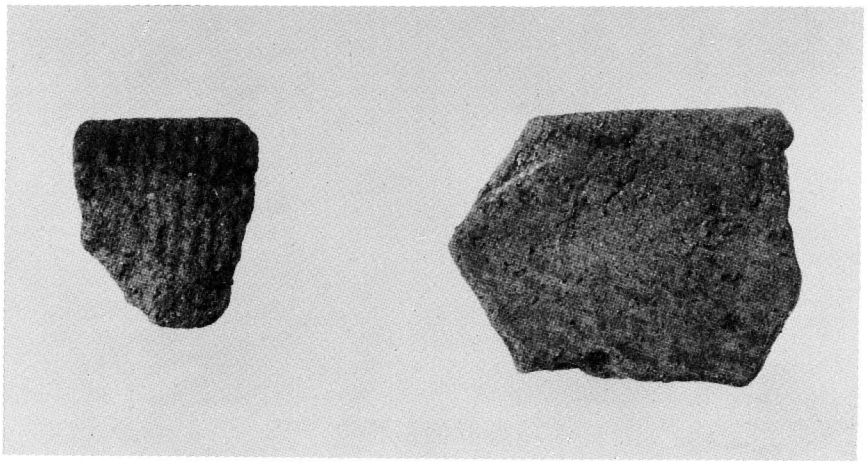
24.　寺平遺跡出土石器



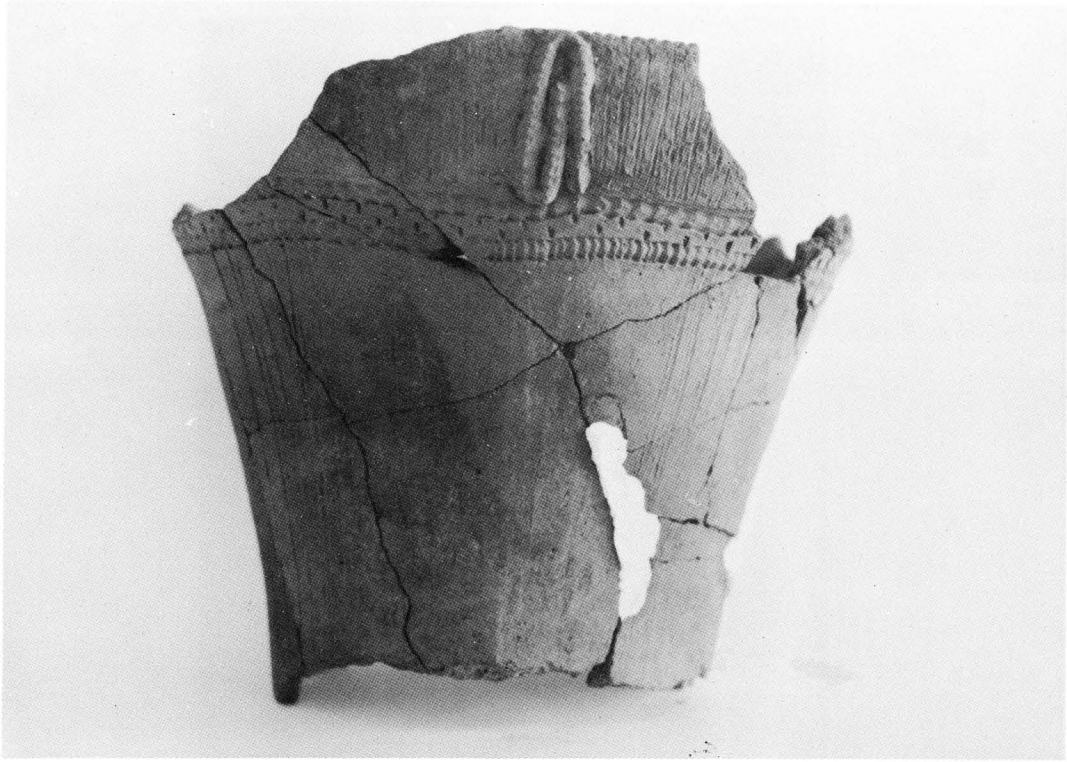
25.　土製円板、石鏃、石錐、玦状耳飾



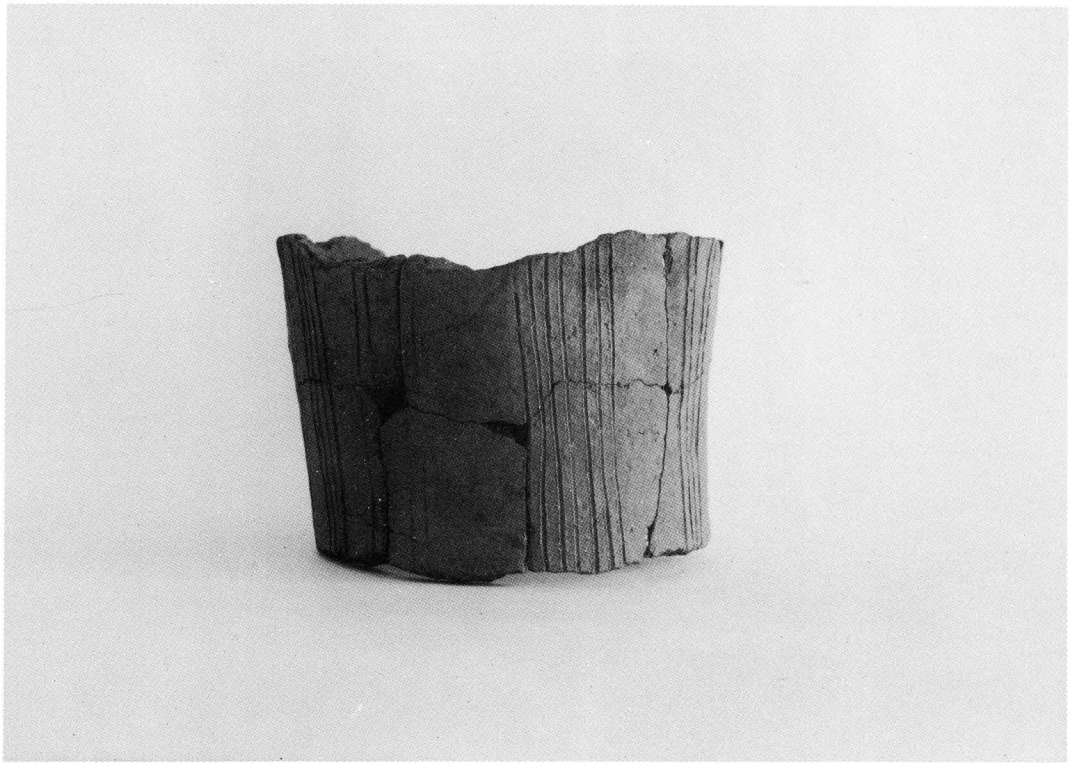
26.　土　　偶



27.　縄文時代早期、前期土器

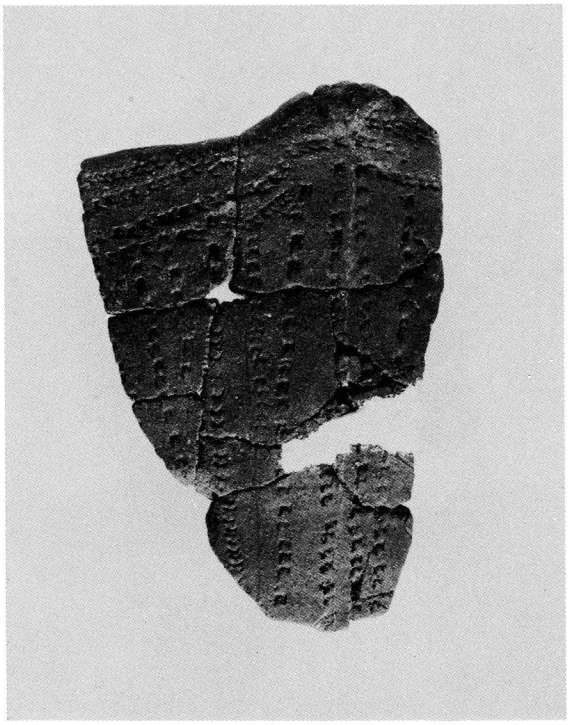


28.　1号住居埋甕炉1



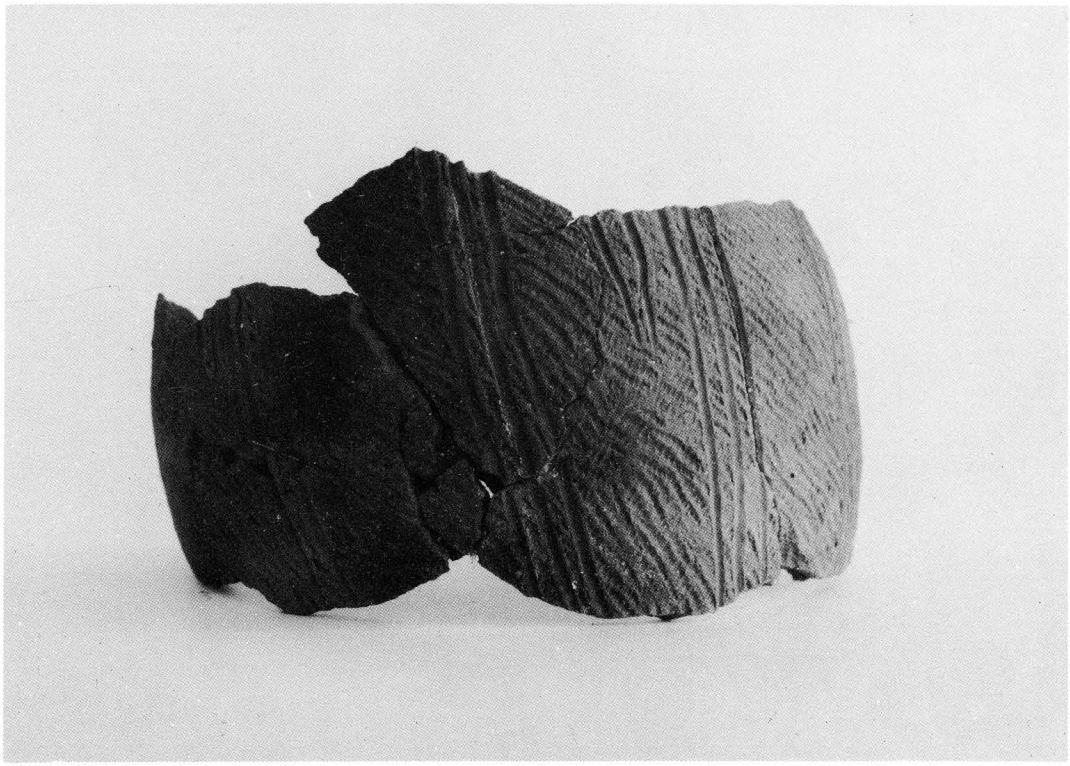
29.　1号住居埋甕炉2

30.　1号住居出土土器

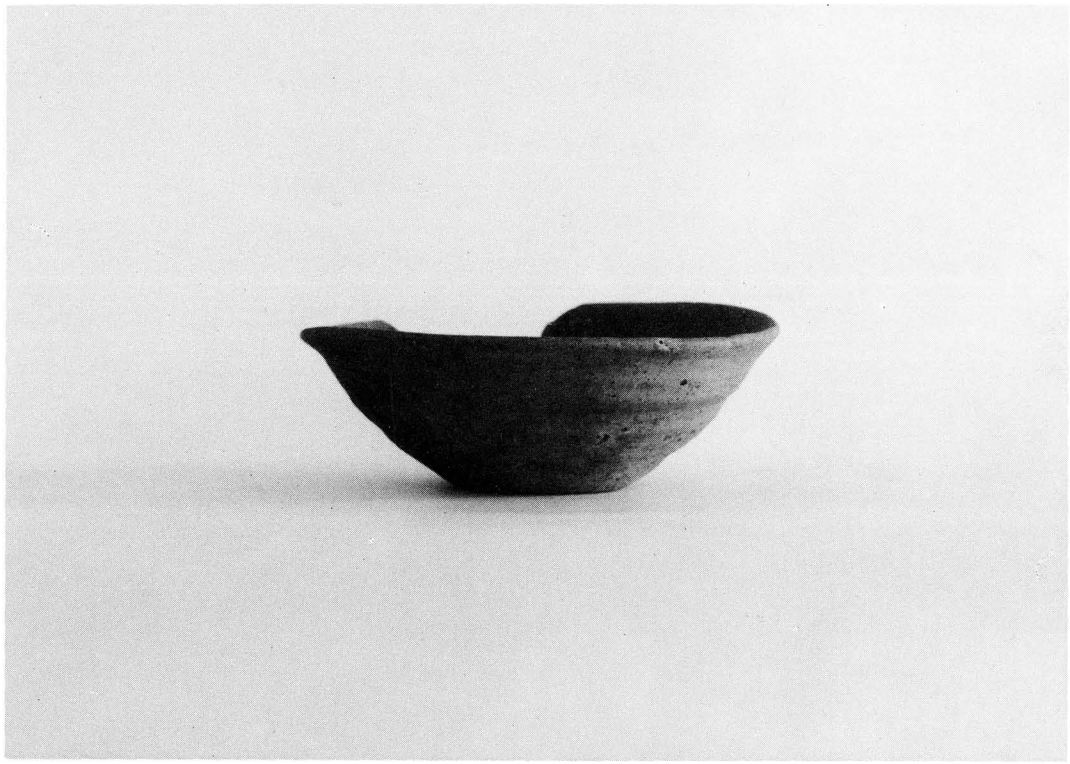


31.　1号住居出土土器

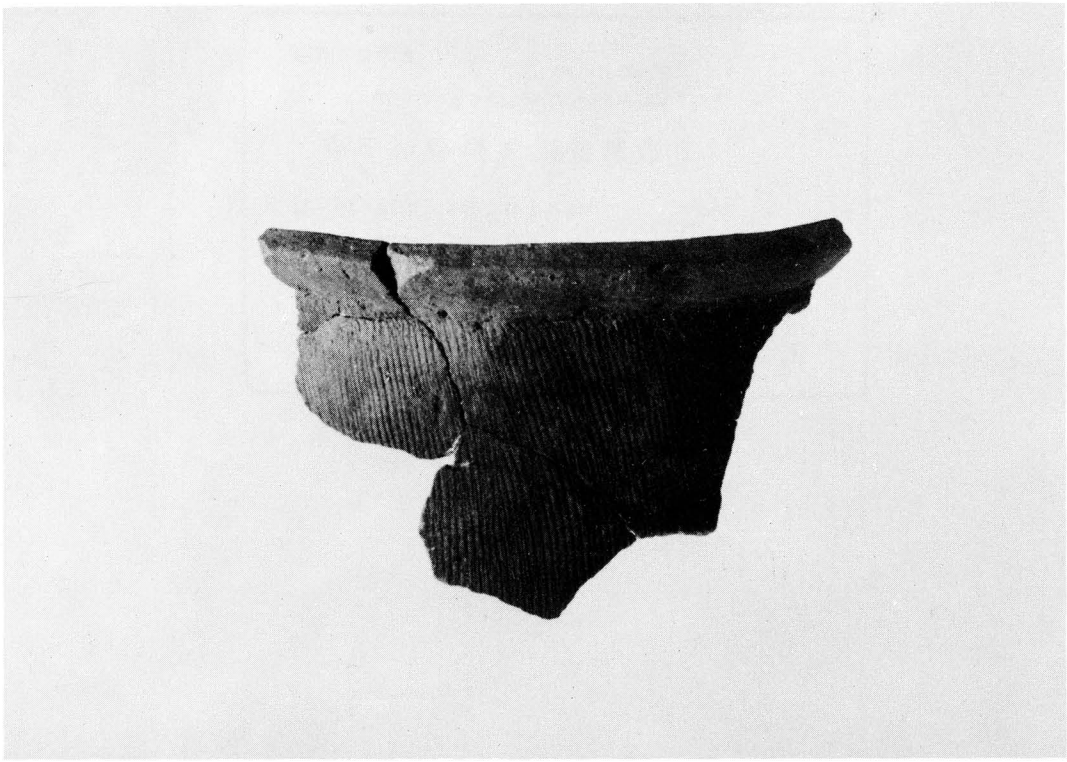
32.　2号住居址埋甕1



33.　2号住居址埋甕2



34.　平安時代坏形土器



35.　平安時代甕形土器

昭和５０年度

―勝沼バイパス建設に伴う―

寺平遺跡発掘調査報告書

印　刷　昭和５２年３月２５日
発　刊　昭和５２年３月３１日

発行所　山梨県教育委員会
印刷所　㈱峡南堂印刷所